

STIR

ステア ISSN-0286-3634
1985 WINTER VOL.14
世界のホテル・バー⑬

"プラザ・バー、カブリー・プラザ・ホテル"
"PLAZA BAR, COBLEY PLAZA HOTEL"(BOSTON)



桂田山頭火(昭和4年11月阿蘇山にて)

句碑巡礼

山頭火の句碑は全国に五十ありますが、生前にてきただつた一つ、死んでから四十九できました。いま、生まれ故郷(山口県)の駅前に彼の銅像ができつあります。

ふるさとは遠くして木の芽
生誕百年記念にこの句碑を建てましてね。感激されました。そのときほんとうに、山頭火故郷に帰るという感じで
五十の句碑のうち、酒の句は少なくて二つしかありません。その一つにこういう句があります。
酔うてこほろぎと寝てみたよ

山頭火、ありのまま

大山澄太

放浪

山頭火の旅・人生・酒

大正から昭和初頭にかけて漂泊の行乞の果てに、数々の句を詠んだ俳人桂田山頭火。酒を肉体の句とし、句を心の酒とし、一所不在の人生を送った一人の男。彼を流浪の旅人として憧憬をこめて語る人あれば、無賴の酒徒と断する者がいる。しかし、生前の山頭火と親交の深かった大山澄太翁の胸に去来する実像は……。

翻って、山頭火を漂泊にかりたてたものは何だったのか。かつて松尾芭蕉は、それを「風羅坊」と称したが。

「旅浪」——浪漫と辛酸の反立する業。それは、求めて求め得ぬ衆愚にとって、いつまでも見果てぬ夢なのか。一浴一杯、鉢の子一つ。旅・人生・酒、山頭火断章。

防府の故郷で破産したといつても、造り酒屋をやるくらいの財力はあったんですね。それで親父と一緒に始めたのはいいが、親父は道楽者。山頭火は飲むはて酒蔵を売つて妻子とともに熊本へ逃げてしまい、その後引き受けたのが大林さんで、今では「山頭火」という銘柄の酒を出して飲んでいますよ。よう売れるそうです。山頭火のファンは多いんですね。それで僕に、「山頭火の句碑を建てたいが、何がいいかな」といつてきただつて、「そりや、『酔うてこほろぎと寝てみたよ』の傑作じゃがなあ」というたら、それを刻んだのです。この間も、「大耕愛讀者二十人と墓参りをしてからあのあたりの句碑を見にい



パーニング・ハート

第11回HBA創作カクテルコンペティション優勝作品。ベースにホワイト・ラムを使い、桂花陳酒、アブリコット・ブランデー、グラン・マルニエを加えたカクテル。キンモクセイの香りとさっぱりとした口あたり。燃えさかる炎の色彩感をイメージした鮮やかな緋色のカクテルである。

- 特集「放浪」—種田山頭火の旅・人生・酒——1
「山頭火、ありのまま」大山澄太
「彷徨——俳人と旅・山頭火考」上田都史

- STIR ESSAY 酔狂雜記——14
「美意識、右往左往」早川良雄

- Fragrance of Spirits and Talks ステア対談——12
徳間康快vs松坂慶子

- 特集「放浪」—RUN ABOUT——18
「18世紀のヨーロッパの旅」本城靖久

- BEYOND THE HORIZON 地平線綺譚——22
「カナダ、三葉虫、そして旅のロマン」三輪主彦

- 世界のホテル・バー——24
“プラザ・バー、PLAZA BAR”
COPLEY PLAZA HOTEL, BOSTON

- LIQUOR IN ART——28
「ボストンの男、バーカー=スペンサー」

- テーマ・エッセイ——32
「夷ぐ」について

- a story of "THE BRANDS"——38
世界の銘酒——14
「ドン・ペリニヨン」

- STIR ESSAY 諸國雜記——14
「シャンバーニュ紀行」

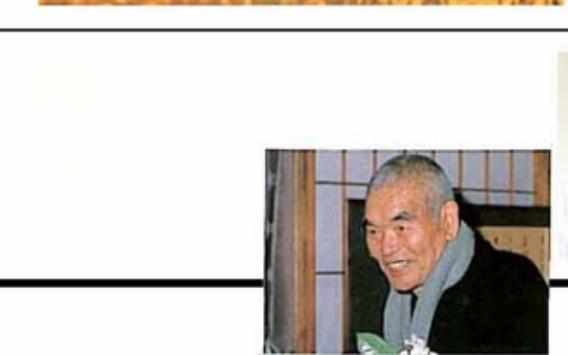
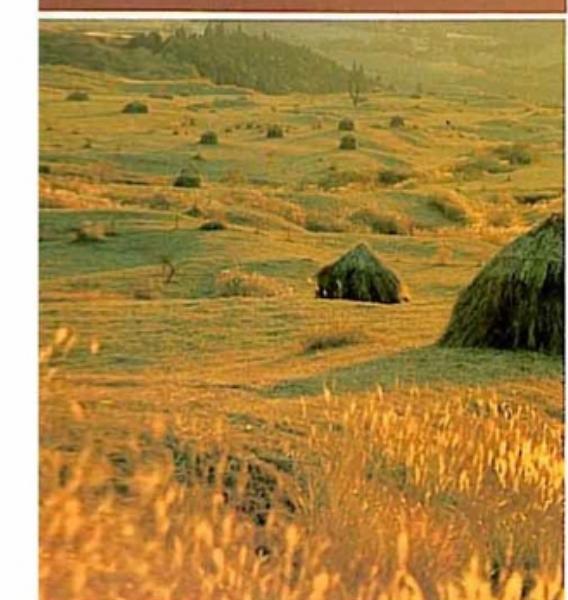
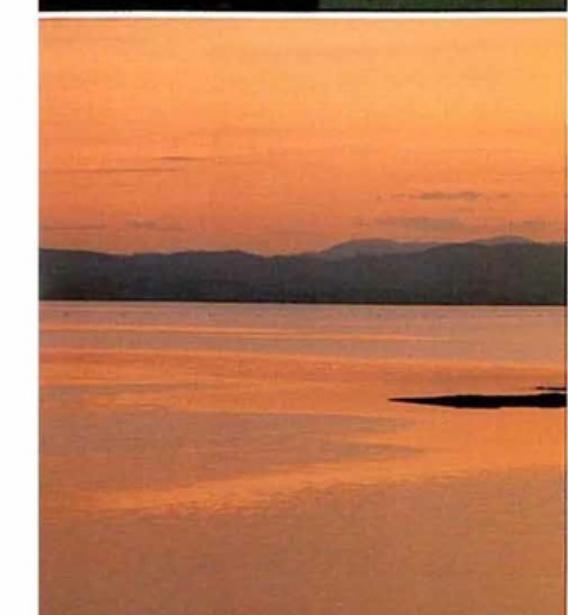
きました。

実はね、大学生のファンなどが休暇になるとリュックを背負って句碑巡礼に行くそうです。最後は松山まで来るんですね、死んだところへ。ずいぶんブルームが長いですね、こうなるともうブルームというものではないのでしょうか。報余誠になりますが、この間は中学校の教科書に山頭火の句を四句使わせて欲しいといつてきました。高校のものは国文(?)に五句用いられているのですが、中学校は初めてですね。

酔うてこぼろぎと寝てゐたよ

この句は昭和六年十一月に、宮崎県の片田舎でできています。漂泊中ですな。句は早くから雑誌で見て知っていたんですが、交際するようになつて、どうして酔つてこうろぎと寝ていたのかと聞いたら、こう答えました。

熊本県との県境に近い方に椎葉の里というところがあります。そのあたりの稲刈った農村を、一軒一軒、お経を読みでまわりおつたんです。あちらの方は、大きな差違書きの家がありましてね。そのうちの一軒で半分あまり読み終わつたときにお婆さんが大きな壺をかかえててきて、「あんた、これ好きか」



(右上)其中庵
(右下)其中庵の庭先にて、大山澄太氏(手前)と。
(下)入庵6日目、書斎にて。
(左)若き日の山頭火



というんです。あの辺はいもの産地ですから、いも焼酎を密造したのでしょう。山頭火が、

「うん」といつて鉢を出したら、コボン、コボンと六合ばかり

ついてくれたのだそうです。それを、

「澄太君、長くそいつたものに恵まれておらんし、腹も

へつとるのて一日で飲んだ」

というんですよ。

「それまで覚えるのがう

とね。ところが、あくる日の午後です、気がついたのは。

ひょっと気がついてみると、誰かむしろをかけてくれた下

の句ができて、これはいいから手帳に書いておこうと思つたら、婆さんが杖をついてそろり、そろり出てきて、

「あんた、ここでよう寝とらつしやる。つれいんて家で寝てもらつたらえんだが、あんまりええ氣持ちで眠らつしゃつとるから、このままにしてむしろだけかけといたよ」

といふんですね。一晩以上寝とつたのです。

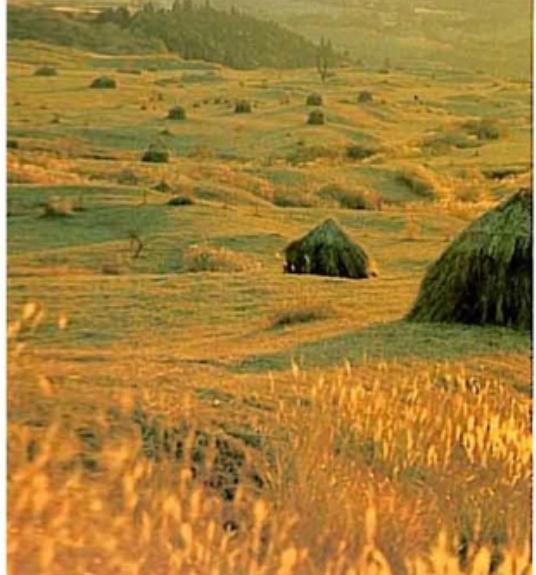
山頭火は良寛さんと同じ曹洞宗ですから、鉢をもつて

全国を行きました。鉢とはいも鐵だけでは重いので、

銚混りでしょう。この鉢にはじ合ひりますよ。それに、

みなみとついてもらつて一気に飲んでしまつたのですか

なみなんとついてもらつて一気に飲んでしまつたのですか



松はみな枝垂れて南無観世音

山頭火が頭を剃つて出家したのは熊本の報恩寺でした。

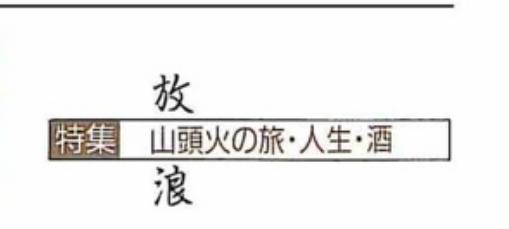
この望月という住職がいい人だつたんです。熊本で頼経屋を始めたものの、飲んだり遊んだりで奥さんが經營している店の売上げ金にまで手を出す有様でした。ある日、そ

んな自分に愛想をつかしたのが、山頭火は自殺しようと進行中の電車の前に立つたんです。市役所や公会堂、通信局のある目抜き通りですから、もう百五、六十人集まつてきなさうです。車内のお客さんは将棋倒して、運転手がうつかりしていたら殺されるところでした。警官もきて大騒ぎのところへ木場といいまして、沢木興道といふ有名な老師に参拝していた人格者が現れて、私が預かるといつて下坪井町の報恩寺へひっぱつてきました。望月和尚はとても親切をして、八畳間を与えたのですが、彼は生殺しの蛇のようにのたうちまわつて、飯をもつていても食べなかつたといいます。苦しみなのでしょう。三日目になつてやつと食べるようになり、四日目から小僧に座禅の組み方を教えてもらうようになつて、お経をよみ朝は住職より早く起きて寒い十一月に尻からげをして縁や中を掃除するようになりました。

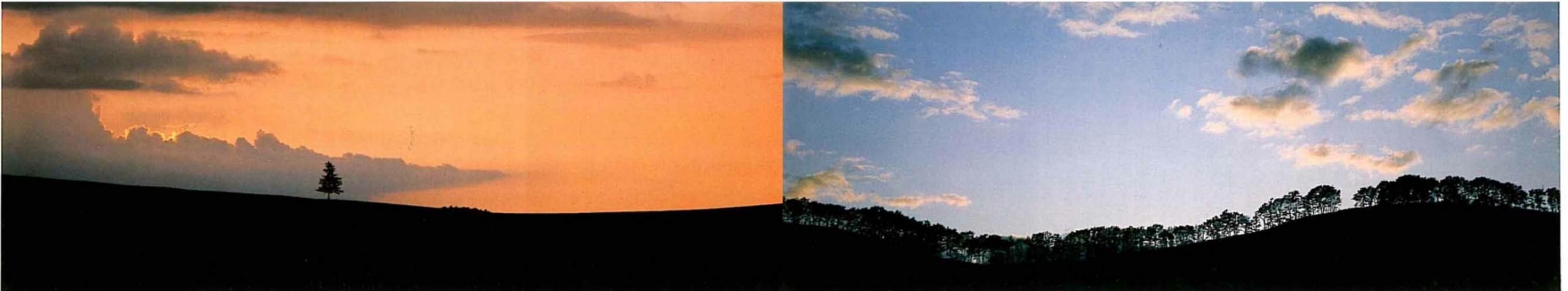
それから一ヶ月ほどしたら真面目くさつて出家したいといふんです。早稲田大学で学んでいますから学問はあるので、むずかしい禅の本でも読むんですね。それで友人を保證人に立てて得度してやり、永平寺へ届けて耕歎と名づけたんです。かたいかたい黒皮姿で、それを剃るときには山頭火も泣きましたが私も泣きましたと和尚はいついました。そして植木町の味取觀音の堂守として赴任させられました。そこに一年二ヶ月務め、眞面目にやつたそつですよ。青年団には日曜学校をやる、子供には幼稚園のようなことをやり、宗教教育をしたそうです。ですから三十三回忌記念に

松はみな枝垂れて南無観世音

の句碑を建てたときは村の人が喜びました。そのとき教えてもらつたという女の人が祝辞をのべられ、耕歎和尚さまに教えてもらつたお経をいまだにおがんんでいると申され



放
特集 山頭火の旅・人生・酒
浪



ました。

結局、一年一ヵ月務め、解き切れぬまどいを背負つて漂泊流転の旅に出たのでした。九州を歩き、四国遍路をし、山陰、山陽とあてもなく九年間歩いて、其中庵におさまつたわけです。その間、彼は漂泊し、雲のことく、水のことく流れているので住所もなく手紙が出来ません。しかし、雑誌にはいい句がでるんです。僕らのは十句投稿しても一句くらいですが、山頭火は十句出せば十句載る。その原稿は先月は宮崎県から、今月は大分県からという有様でどこにいるかわからん。そのうち「層雲」の昭和七年十二月号の隅の方に、歩き疲れた山頭火は漂泊山口県小郡町宇美足の「其中庵」に笠をぬいたと出た。その頃、僕は広島で勤めていたのですが、文通が始まり、翌年三月に手紙がきて会いたいんだやが汽車賃がないんで会いにきてくれとあった。こうして会いに行き、親しくなったんです。

句集「鉢の子」の次に「草木塔」、「山行水行」、「鴉」、「雑草風景」、「柿の葉」、「孤寒」……：

親交が深まるとともに、僕は一年に二冊ずつ句集を出してあげました。経本仕立てで、部数は三百部でしたが凝ったものでした。手書きの和紙は人間同室の出雲の安部さんのです。そのものを使いましてね。発表できるからそれが彼の創作意欲も盛んにしたと思います。

彼に小遣いとして五円渡すと一二三日で飲んでしまって余代もない。できた句集は「層雲」の名簿を見て友人に送ります。すると、ある人は五円、ある人は一円と送金してきますから、これを戻代、油代、米代にしました。これはあとから考えて、若い頃の私が世帯じみたことによく気がついたと思いました。

僕が最も感動したのは、昭和九年十一月三十日のことだったと思います。役所の用事で山口に出来張して、山口と小郡は汽車で二十分くらい。もし時間があつたら会いにいくこと、広島の賀茂鶴を一本持つてきました。用事は早くすんだが、そのあと湯田の温泉で宴会が用意されているといふ。そこで、まだ早いから宿だけとつておいてくれ、この南にこういう孤独な俳人がおつていつも一人なので僕

法衣を足にかけ、酒を包んできた私の風呂敷をかけて、ぬくいかと聞くんです。うそもいえませんから、「ぬくうない」というと、考えたあげくに向こうからヒモのついたものをもつてくる。ランプが暗いからわからなかつたが、近寄つたのをみると赤の越中ふんどしなんです。この辺が寒いかといつて首のあたりに巻くもんて、もういいといつて私はとつて投げたんすが彼は真剣ですから大きい机を持ってきて、僕の経験ではぬくい感じがでるから」とどんと腹の上にかぶせるのです。そのうち僕は並段は一合くらいなのに、三合飲んだことをあって酔いの勢いと寝てしましました。

よく寝ました。四時前に目がさめると東の障子がかすかに白んでいました。山頭火は寝すに起きているといつたがから柱がゆがんでいる。障子をしめても上はしまつたが下は開いていて、そこから夜明けの風が入つてくる。その風の方へ背を向けて自分を屏風として僕の枕元を守つて座禅を組んでいた。僕は机の下で泣けました。僕が起きたことに気づくと、

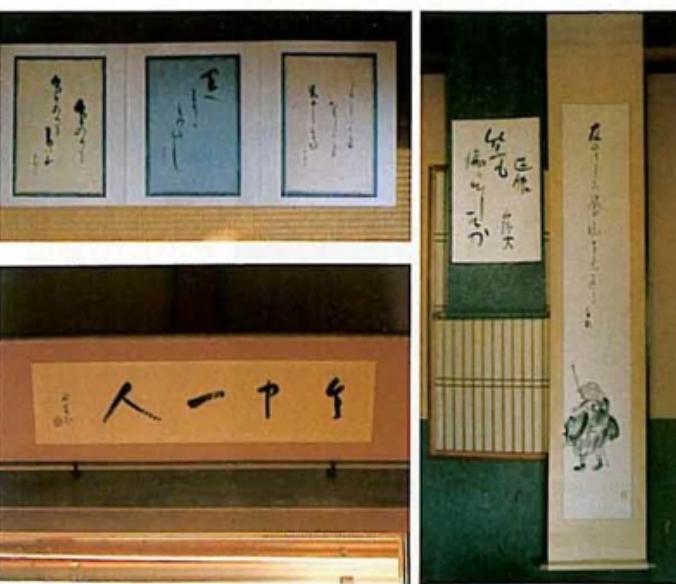
「寒かったろう」

というんですねが、返事ができなかつた。酒を飲んでも山頭火、本心は狂わんです。それから考えました。もう五十過ぎて行乞せねば酒も米も庵にはない。一肌脱ぎうという気になりまして、その月分から彼が死ぬるまで自分の月給の四分の一ずつ山頭火に使うつもりだ。

山頭火ほどの人間はおらんです。それは死後、彼の日記をみてもわかる。人に見せるためのものではないから、山頭火の本音がわかる。日記は自画像で、「肉のベンに血のインクをつけて書く」わけですから真剣です。それが本や雑誌に掲載されるとは夢にも思わない頃ですから、むしやくしゃしたら何が書くでしょうが他人を貢める文学は全然ない。自分でけ責めている。山頭火しつかりしろ、とか。善良なんでしょう。今、日記は松本市へ寄贈してあります。

僕が死んでも私有財産でなく市の所有にしておけば永久に残りますから。

それから、山頭火が出した手紙を皆、大切に残しているんですね。「山頭火全集」(春陽堂刊)の第七巻が書簡集で、集め歩くのに苦労しましたが皆たいて持っていた。ふつう手紙や葉書は読んだら捨てます。まして山頭火は乞食坊主の飲んだくれでしょう。九州の友人の本村綾平さんなんかは二百通も持っていた。これらを第七巻に収めましたが、本当に無駄のない葉書で、やっぱりこれは捨てられんと思います。そういうえば、綾平さんや僕のところへは旅



が行くと喜ぶからといって、宴会は流してバスに向かいました。バス停に降りると豆腐屋がある。彼は豆腐が好きなので豆腐を十二丁買って、山頭火米たそとこれらをどんどん置いたら、よう来たともいわんてコップを持ってきた。口を切つて立つたまま飲むんです。飲んだあとで、君、こんなうまい酒を一本もくれるのかと——これが山頭火と僕のつき合の方なんです。

豆腐もあるといつたら喜びましてな。お経を読みに出るにも時雨が降つたり、雪が降つたりで出られんの梅十に自湯をかけて飲んでいた。さつそく湯豆腐にしようと言んていろいろな話をしながら一本済んだんです。午後九時になって、もう時間がない、九時十分頃に湯田に行く最終便のバスが出る、僕はこれで宿に帰るからというと、すぐるよう、わしは人と一緒に長く寝たことがない。雨戸もなつたと。十七年上の人在い部屋に残して後輩が温泉宿へ行くのもいがんの、それじや泊まるといつたら喜んだですね。

それで次の一本をやり、ぐてんぐてんになって、もう寝ようじやないか千鳥が鳴さだしたといつたら十一時半でした。そのとき、山頭火は急にしまつた。大失敗をしたといふんです。何がというと、君を引きとめたのはいいが蒲団がない。もつと早く気づけば貸してくれる家が一軒ある。しかし、夜中に夜日を貸してくれとはいえんから僕の蒲団で寝てくれといふから君はどうするんだと聞くと、君が泊まるのが嬉しいから起きているといながら蒲団を敷いてくれました。敷き蒲団はいいものでしたが、掛け蒲団はどうからもらってきたか、ひろつてきたのかしらんが中供の蒲団でな、僕の背が高いものだから具合が悪い。首まであげると足がでるので足袋をはいたまま、羽織を脱いでかけた。山頭火さん、これはそわそわして眠れんがといったら、君のところにいくと奥さんが炬燵に毛布を敷いてぬくうして寝させてくれるのに風邪をひかせて帰したら申し訳ないと泣くようにいふんです。そして押入れを探して湯あがりの予備を一枚出してきてかけてくれました。それから



放
特集 山頭火の旅・人生・酒
浪

先からSOSの手紙がきましてね。緑平さんは金持ちだから十円。僕は三円か五円送金しました。そういう手紙があつたんです。余計なことは何も言わず、頼むと……。ただSOS」と書いてありました。

風のなかおのれを責めつつ歩く

私が広島にいる頃はよく泊まりにきました。そうすると、近所の高等師範などの国文学の学生が集まつてきました。ある日、ほろほろ酔うてきたときに、いつもニコニコしているのが妙に嫌気が悪くなつて僕にいうんです。山頭火は人から過剰評価されるのが嫌いだ、かしいかぶられてはいかん、君と九州の木村緑平君はわしをかいかぶつてはいる。わたしはそれほど偉い人物ではない。坊主にはなつてはいるが破戒僧のくそ坊主だ、わしをあまり大切に山頭火、山頭火といつてくれるな、と怒るよういうので皆、異様な表情で聞いていました。長い話を始めました。

昭和五年の三月の終わり頃、山頭火は北九州を歩いていた。ばたん雪が降つて、海岸の村は全部戸を開めているから、お経が聞こえず何も入らん。これは宿質もなく、野宿するにも雪が降つていて困ると思いながら四時頃まで歩いていると若松という港町についた。九州文学の火野葦平

いいのかわからんのです。

風の中おのれを責めつつ歩く

という句があるが、これはそのときの句だといい、皆が

思つて雪の中を透かして見ると二階建ての遊廓なんだ。

思つて雪の中を透かして見ると二階建ての遊廓なんだ。それでお経の声を聞いて、これは僕の想像なんだが、女郎が

里心を起こさんでしような。なかには追いかけてきて後ろからチャリント入れたりして、向こうの端まで行かないうちに重いほどになつてしまつた。そこまではいいんだが、ここで第二の山頭火が出てきた。女郎からもらつた錢で女郎が買つてしまつた。破戒僧だからね。それで、皆大笑

ぶれてしまつた。ハツと気がついてみると午前二時過ぎて、両端に赤い蒲団で女が寝ている。我に返つて、これじやいがん、何のための出家か、お釈迦様にも頭を剃つてくれた老師にもすまんと、もらつたお金帳へ投げ捨てて店を飛び出した。さいわい雪はやんでいたが、風が吹いていた。

逃げるよう黒崎という町に向かつて歩き出した。

その話を聞いて、皆最初は笑つていたが笑えんようになつた。山頭火は、こういうくそ坊主だから山頭火、山頭火といつてくれるなという。笑つていいのか、どうしたら

元気がないのう

というと、

「草屋根が雨もりしだした、笠ももりだした、心臓も破れたらしい。バカ酒を飲んだり、野宿をしたりで体もだめだ。

どうも日頃とは違いますから、しつかりしてくれといふ旅に出るため、庵を捨てて出てきた」

真剣で、一合くらいしか飲まないんです。翌日、知り合の医者に連れていつたら、本人の息を見てまして、

「山頭火さん、あんたのいうとおりじや。一年ならないほどもくばくもない。しかし、全国に友達がある

旅に出るため、庵を捨てて出てきた」

「いや、時がきた。今度は君に逢つてから死に場所を決め

た。山頭火は、こういうくそ坊主だから山頭火、山頭火といつてくれるなという。笑つていいのか、どうしたら

元気がないのう



いて、日本中歩いて、先年は平泉まで行つた。毎年、句集は出す。本当に幸福な一生涯じやたのう。いつ死んでもいいでしよう」

これが診断ですからな。僕は山頭火がどう返事をするか耳を澄ましていたら、「そうであります」

と人のことのよういうんです。彼は生死を超えているのです。それならばと連れて帰つて、死に場所はどこが好きかというと、ぬくいところがいい、四国だという。四国遍路のときいい印象をもつていていたらしく伊予がいいといいます。伊予も広いがどこがいいかというと、松山がいいと。正岡子規先生はじめ一流の人はあそこから出ているし、城のたなづまい、川に沿つた松並木といい、実に俳諧的な風土だ、あいとうところで死ねたら申し分ないといふんですね。そこで親しくしていいる松山高商の高橋始さんに長い手紙を書いてそれを見せ、松山へ行くに決めました。十月一日の朝、宇品から八時半の船に乗るというので早く起きて、客間で荷物を整理していました。桺の本などは僕にくれて、わざかなものを風呂敷に包むときには白い布で包んだものが落ちた。さつと拾いあげておがもので、山頭火さんそれは何か、と聞くと、これは自殺した母の位牌だといふ。山頭火は種田家の没落はこの母の自殺から始まつたのだ、そのことを君には聞いてもらっておこうといいました。其中庵では仏間にこれをまつり、毎朝夕、お経を読んで線香をたてていたそうです。四五日の旅はそのままして、長い旅は母の位牌を背負つて一緒に旅をしたといふのです。旅をしてときどき野宿をするとき、自分はいいがお母さんにはすまんというの位牌を自分の肌で抱いて寝た。母と一緒に漂泊をした、涙をこぼしつ語るのでです。

早稲田にいるとき図書館に行って何とはなしに仏教の本を開いたら、不思議ですなあ、もし在家で生まれて出家したら、その功德によって先祖でさよつている亡靈があれば成仏できるとあつた。母は父親を恨んで二十二歳の三月六日、井戸にとびこんで自殺したのだから正一は坊主になりますと誓つたといふんです。それからいろいろあって、あのように熊本で四十二になつてから出家した……。

(上)私家版句集(復刻版)
(下)「其中庵の山頭火」(岡本淡雅画)



酒に関する覚書(一)

酒は酒甕に盛れ、酒盃は小さいはど可。
独酌三杯、天地洞然として天地なし。
さしつ、さされつ、お前がへえば私が踊る。
酒屋へ三里、求める苦しみが与へられる歡び。
酒のみは酒のめよ、——酒好きに酒を与へよ。
飲むほどに酔ふ、それが酒を味ふ境涯である。

酒に関する覚書(二)

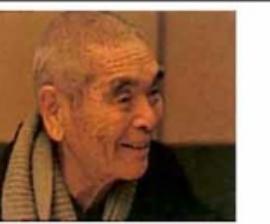
酒中逍遙、時間を絶し空間を超える。
飲まずにはいられない酒はしば／＼飲んではならない酒であり、飲みたくない酒でもある。飲まなければならぬ酒はよくない酒である。
飲みたい酒、それはわるくない。
味ふ酒、よいかな、よいかな。
酒好きと酒飲みとの別をはつきりさせる要がある。

酒好きで、しかも酒飲みは不幸な幸福人。
生死を明らめるのである。

酒に関する覚書(三)



一草庵



放
特集 山頭火の旅・人生・酒
浪

彷徨 俳人と旅・山頭火考

上田都史

人は誰もが旅に出る。さまざまな理由から旅に出る。商用の旅も、政治向きの旅も、物見遊山、探勝冒險の旅も、脚行門付の旅もある。俳人と旅ということに限つても、これも、また、さまざまである。

文学の世界では、日常の無差別性、平均性によって、つまり、自分以外のものと考えて他律的に生きるのでなく、そうした日常の秩序や価値の虚偽を排し、離脱し、自律に立つて日常性を拒否、本来の自己を呼び戻すそのための旅として旅を考え、旅に出る。中世日本の隱者たちの旅がそうであった。

ここに、種田山頭火といふ放浪漂泊の俳人がいる。山頭火は五十八年の生涯をたくさんの旅で経た。そのなかの一つの旅、昭和六年十二月二十一日、私はまた草鞋を穿かなければならなくなりました。旅から旅へ旅しつづける外ない私であります。

と、親しい人々に書き送つて旅に出た。山頭火は熊本を発つ、「十五日に久留米、二十六日太宰府、二十八日福岡、年があらたまつて昭和七年一月には佐賀へ入つて浜崎、唐津、嬉野、二月から長崎県の千葉を振り出しに各所をまわり、三月佐世保、四月平戸、伊万里。それから福岡へ入つて小倉、糸田を経て五月三日に下関、二十四日山口県川棚温泉、二十七日また下関、二十八日八幡市、三十一日吉見、そして、六月一日、川棚温泉に戻り、ここで長期滞在する。

鐵鉢の中へも寂しきろすがたのしぐれゆくか

などの人口に駄文している名句もこの旅で詠まれ、山頭火の旅のなかでは元実した旅の一つといえよう。出発したその翌年の一月の日記に、山頭火は次のようなことを記している。

昨夜はちよこまつて寝たが、今夜はのびのびと手足を

自己規制のきかぬお人好しに過ぎなかつた。

母の自殺を契機として、種田家の有り余る身上は普をたて崩壊する。この悲劇的な種田家終焉の経過の中で山頭火は少年期青年期を過ごす。衝撃的な母の自殺が、人間形成のうえで無関係であろう苦はない。

母の祥月命日には、山頭火の次のような言葉が見える。

「沈痛な氣分が私の身心を支配した。私たち一族の不幸は母の自殺から始まる」

そして、母の四十七回忌には、

うどん供へて、母よ、わたくしもいただきまする

の一句に亡母への限りない想いを託している。山頭火はこの不幸について「母に罪はない。誰にも罪はない。悪いとはいひみんな悪いのだ。人間がいけないのだ」と、総括していき。それは、父親の放蕩三昧や、姑の嫁いびりなど、若き母を死にまで追いやった残酷の数々はどうなるのか。山頭火はこの現実を人間個々の責とせず、原罪の意識に絞つて考えるのである。だとすれば、母の自殺という衝撃が照射する限り、山頭火にあって、その不幸は、決して乗り越えることのできぬ暗い深淵として存在する。

山頭火の旅、その彷徨漂泊はこの原罪の意識と領ち難く繋つてている。體魄を供えて母の位牌に合掌するひとときの間だけ、山頭火はその深淵を忘却するが、それはほんの須臾の間だけで、山頭火の裡なる荒野は漠々として果てしない。だから「解くすべもない惑いを背負ふて、行乞流転の旅へ出た」のである。

山頭火がこうして旅だったのは大正十五年四月、そのおよそ二百五十年前、貞享元年八月に一人の俳人が江戸より上方へ旅だつている。松尾芭蕉である。

野ざらしを心に風のしむ身哉

は、その首途の吟である。山頭火と同じ四十代であつた。

東海道を直行して伊勢に着いた芭蕉は、八月二十九日外宮を参拝し、九月には伊賀上野に入った。上野は芭蕉の郷里である。兄の半左衛門の家で、前年鬼籍にはいった母の遺髪を拌み、万感こももいたつて涕涙する。芭蕉の母は山頭火の母のような非命の死ではなくたので、その悲しみの質もおのずから異なるが、慈母を喪つた悲しみは深かつ

放浪

特集 種田山頭火の旅・人生・酒

伸ばすことが出来た。「浦団短かく夜は長し」。此頃また朝魔羅が立つようになつた。「朝、チボの立たないやうなものに金を貸すな」これもまた名言だ。人生五十年、その五十年の回顧、長いやうで短かく、短かいやうで長かつた、死にたくても死ねなかつた、アルコールの奴隸でもあり、悔恨の連続でもあつた。

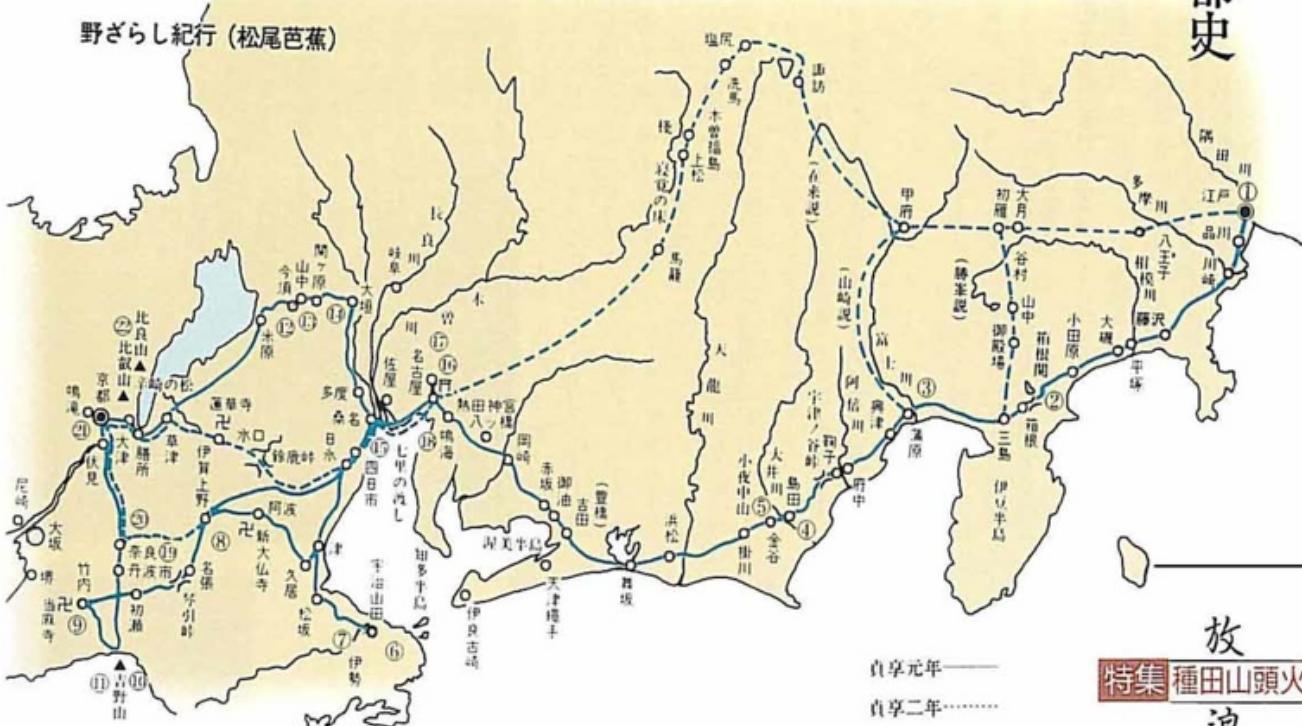
歩いた。歩いて、歩いて、とう／＼こゝまで来た、無論行乞なんかしない、こんなにお天気がよくて、そして親しい人々と別れて来て、どうして行乞なんか出来るものか。

もう財布には一銭銅貨が二つしか残っていない。今日から嫌でも懇でも本気で一生懸命に行乞しなければならないのである。

さて、山頭火にとつて旅とはいつたい何であつたのだろう。山頭火が翻然と放浪漂泊へ身を投じたのは、山頭火四十五歳の春で、

解くすべもない惑いを背負うて、行乞流転

と、厳しい感情を書き留めている。その遠い背景には、山頭火十一歳のときの母の自殺がある。このへんのことをかいつまんで述べると、山頭火の生家は山口県の防府にあつて、一キロメートルほど離れた山陽本線の三田尻駅まで他人の土地を踏まずに歩いた、と、いう大地主のもの持ちであったが、山頭火の母は、広大な屋敷の片隅の古井戸に身を投げて自殺した。そのとき、父は若い女を連れて遊山旅行中であった。よくいえばこの父は磊落、金錢に恬淡で誰にでも好かれたが、つまり、理財の才に欠け、まったく



た。郷里に四、五日逗留した芭蕉は、九月吉野山に名所旧跡を訪ね、大和・近江を経て美濃に入り、大垣、桑名、それより海上七里渡を経て熱田、名古屋、再び熱田に赴き、十一月伊賀上野へ帰つて越年。貞享二年には薪能を観に奈良に赴き、水取の行事を拝み、京に上つて伏見西岸寺の任口上人を訪ね、

我衣にふしみの桃の半せよ

と、吟じている。三月大津に至り、これより一路、東海道を江戸へ、途中中妻へそれ、各所に立ち寄つて四月末、江戸深川の草庵へ帰り着いている。

いかにぞや、汝ち、にくまれたるか、母にうとまれたるか。父はなんちを憑むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯是天にして、汝の性のつたなさをなけ。

この旅の初め、東海道は富士川のほとりで一人の捨て子を見かけた芭蕉は、

いかにぞや、汝ち、にくまれたるか、母にうとまれたるか。父はなんちを憑むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯是天にして、汝の性のつたなさをなけ。

芭蕉が「句調すんば舌頭に千転せよ」と厳しいのとは大きな違いで、芭蕉は「唯是天」と一應己を納得させが、哀れげに泣く捨て子を引き据えてみれば、諦念と現実の相対は如何ともいたし難く、猿を聞人捨子に秋の風いかに

と、杜甫の「聽猿寒下三声淚」に連動してこの一句を書き留め、仮借なく己を問い合わせるのである。ここには人間的な芭蕉の懶閑がある。そして、それは、芭蕉の限りない人間的あたなかさ故の哀愁で、芭蕉の全句を貫く太い筋である。

この「野ざらし紀行」の旅をふくめて芭蕉は、前後三回大きな旅をしている。その旅は常に芭蕉の人生觀を高め、その文学觀をいつそう深めた。

山頭火の大半の旅はそうではなかつた。

芭蕉は生きることと、表現者としての文学精神との激しい攻め合いの中に壯絶なまでに生きた。しかし、山頭火は「煩惱を煩惱とするなれ、こだはるなけれ、とどまるな

かれ、疑うなけれ、流れるままに流れるところまでゆけ」と、困難に立ち向かうことはすぐにはせず、「九官鳥になれ、くつわ虫になれ、そこに安住せよ」と、自らにいつて諾かす。绝望も懷疑もあらぬ方に押してやつて、敢えて精神の闘いを回避する者に、どうして心緒に響く美しい俳句が書けるだろうか。

山頭火は、自分の俳句をどうたら俳句といつていて。芭蕉が「句調すんば舌頭に千転せよ」と厳しいのとは大きな違いで、芭蕉は「唯是天」と一應己を納得させが、哀れげに泣く捨て子を引き据えてみれば、諦念と現実の相対は如何ともいたし難く、

旅とは日常生活の形態とその繰り返しから離脱することにとどめ、旅ゆくことによつていいよいよ強くそれを存在せしめるとき、山頭火はその詩魂に見事な翼を与え、その俳句は山頭火独自の光芒を放つ。まさに、山頭火は自律する。それ故に孤独感や不安がつき綱うが、敢えてそのただ中に自らを瞬すことによつて世俗の約束事から解かれ、他律的にのみ生きる自己的の自律を確保して、自由であり得ようとしめる。日常生活を非日常とすることである。解くすべもない惑いを背負つて旅だつた厳しい姿勢は、山頭火が己の精神の旅とは日常生活の形態とその繰り返しから離脱することにとどめ、旅ゆくことによつていいよいよ強くそれを存在せしめるとき、山頭火はその詩魂に見事な翼を与え、その俳句は山頭火独自の光芒を放つ。まさに、山頭火は自律する。それ故に孤独感や不安がつき綱うが、敢えてそのただ中に自らを瞬すことによつて世俗の約束事から解かれ、他律的にのみ生きる自己的の自律を確保して、自由であり得ようとしめる。日常生活を非日常とすることである。解くすべもない惑いを背負つて旅だつた厳しい姿勢は、山頭火が己の精神の旅とは日常生活の形態とその繰り返しから離脱することにとどめ、旅ゆくことによつていいよいよ強くそれを存在せしめるとき、山頭火はその詩魂に見事な翼を与え、その俳句は山頭火独自の光芒を放つ。まさに、山頭火は自律する。

芭蕉は木宿宿にたむろする女の油売りや、研屋、大道芸など、さまざまな世間師の奇行やエロ話に興味をもち、俗であつて、それを書き留めてみてもなんの積極的な意味もなく、怠惰を増幅するばかりである。

芭蕉はそうではなかつた。精神の自立確立を終始旅の中に勝ち取ろうとし、名所旧蹟を訪い、川弟知友と旧懐の情を温め、名僧知識と会うなど極めて積極的であった。そればかりか薪能を楽しんだことは前に触れたとおりである。

STIR essay

グラフィックデザイナー
早川良雄



右美往意左識往

いまださ、なんとも古めかしい話で恐縮だが、飛行機がプロペラからジェットにとつてかわりつた頃のことである。「超音速ジェット機」というモノクローム映画があった。映画のテーマは、音速を超えるために寝食を忘れたエンジニアたちの英雄的な労苦を描くことで、画面ではプロペラのない異様な飛行機が主役であった。

なぜ異様に映ったのか？ その頃はくは、いつい飛行機からプロペラをうばはしてしまなど、そんなバツの悪い姿があるものか、たとえば腰の大小をとりあげられたサムライのように、また「クリーク」のないコ一ヒーなんて…」のよう、どうにも格好のつかないシロモノではないか、といぶかしく思っていた。

その思いは、もっぱら美学的・形態学的な視点からのもので、その伝てゆくと、いつも昔まえの複葉機のほうがあつと飛行機らしいということになり、煎じつめれば、ライト兄弟がはじめて空を飛んだ頃の古典的なのがいちばんということになる。

なぜなら、見た目にも揚力と推力をはつきりと感じさせる姿だからである。

速く空を飛ぶという能力ではジェットの敵ではないが、あのアーキベンコの彫刻のような無駄のないプロペラの流線の美しさ、そしてそれが回転して空気を割く音の音切れの良さ、それは、ぱくにとつて飛行機といいうものの原型であり、その核心であつた。

そのプロトタイプが、文明の進歩といいう大命題のまえに姿を消し、目にも見えぬが、浮かんでいるのか、どうして進むのか、目に見える形での証明がないから不思議なの

だ。当時のぱくには、プロペラを失うことによって飛行機は人間世界から別次元の彼方に飛び去ったように感じたのだ。

いまでも小型のプロペラ機に乗ると、プロペラのリズミカルで快い連続音を聞きながら、確かに空を飛んでいるという実感と安全感があるが、気密で音もなく飛ぶジェット機には、突如としていつさいが停止するよう、そんな不安感がつきまとつて離れない。

しかしてある。慣れとはおそろしいものが併存する限り、そして、流転、彷徨、漂泊が日本人にとってあたりまえの事実としてなんの抵抗もなく眺められる。たまたま、空港の片隅などに小型プロペラ機を発見すると、それが感傷的な懐旧の対象として映るのだから我々がから可笑しくなる。

そればかりか、最新鋭のジェット戦闘機が、その性能をギリギリまで追いつめたシロペラのない飛行機が、もうぱくの目に昔のような違和感を与えない。その姿はしごくあたりまえの事実としてなんの抵抗もなく眺められる。たまたま、空港の片隅などに小型プロペラ機を発見すると、それが感傷的な懐旧の対象として映るのだから我々がから可笑しくなる。

さきに書いたように、プロペラを失った飛行機に落胆したぱくが、やがてジェット機の完璧な機能美に打たれるように、古きやへに舞いあがり、アッという間にケシ粒の一点に消えてゆく鋭い針のようなジェット機には、科学の極みに見る非常の美學があり、それもまた現代のロマンなのだ

と思は知られる。

考えれば、ことは飛行機に限らない。たとえば、S-Lが新幹線に、汽船には煙突が不要になり、ミシンから踏み板が消え、ソロバンが電卓に代わった。ぱくたちの身边にはこの種の変化がゴマンとあることだらう。それはそれ、第一・第三の技術革新とやらの文明開花で、ぱくたちの暮らしを際

旅ゆくことによつて芭蕉がその人生觀を高め、文學觀をいつそう深いものにしたのは故なきことではない。「愚」といふのは山頭火の専壳のようなものだが、芭蕉に次のような紀行文の一節がある。

「暫く学んで愚を曉らん事をおもへども……」というのである。學問をして自分の愚でありたくない意図表明である。ところが、山頭火は「愚」であることを自ら望むことによつて、己の「愚」を納得している。この稿の最初に引いた日記のように、山頭火は己の下半身のことに興味をもち、また、そのようなところに山頭火はあつた。

山頭火の旅は行乞の旅であつた。それを綴つた「行乞記」は彪大なものがある。しかし、山頭火は禪僧として本来の行乞の意味を体得して行乞したであろうか。行乞とは本来、修行僧が経文を唱えながら各戸の前に立ち、米や錢の施しを受けてまわることである。それは、生産行為にたずさわつていよい僧が、身命をささえて修行に専念できるため食を乞い、施しを受けて歩くことで、施を受けるからには、厳しい禪僧としての修行がなされねばならないが、山頭火は自分の勝手な都合で行乞した。今宵夜露をしのぎ、食べて過ごすだけの喜捨を受けながらも、更に行乞をつづける。それは、酒代を得るためにあつた。

このことを山頭火はみずから顧みて、これは偽りである、などあさましい心根であろうかと反省し、そのあさましさから立ち直ろうと幾度も決意し、仰々しくも、我昔所造語悪業皆由無始貧曇痴

従身詫意之所生 一切我今皆懺悔 という懺悔文をその日記に幾度も書き記して、心もあらたに誓いを立てるが、日ならずしてそれは反故になり、まさか立ち直ろうと幾度も決意し、仰々しくも、このことを山頭火に言つた。「よく過飲泥酔のいたらくもあつてはならぬことに違ひない。禪僧耕畠ゆえに幾度か」の実像、耕畠に立ち戻ろうとするが、それは、むなし企てであった。そんな企てが成功するわけはない。

山頭火にあつて虚像は、ぐうたらな山頭火ではなく、山頭火がなんとか、本音の自分の姿に立ち戻りたいと希つた禪僧耕畠こそが、実は、虚像だったものである。実像が虚像を追いまわして、その中に実像を捉えようとして、いったいなにを捉えることができよう。

山頭火のぐうたらには、戒律を破つたといいささかの羞恥が働いている。しかし、戒律を破つたといういささかの羞恥が働いていた。しかし、戒律を破つたにはその前提がなければ破戒は成り立たない。山頭火においてそんなものはなにもなかつた。ただ、禪僧耕畠の幻想の残滓、残りかかる碎かれたのではなくして、自ら碎いてしまつたのだ。見よ、碎け散つた破片が白日に曝されてこそを掲いでいる。

山頭火はいみじくも、初めて山頭火ははいみじくも、書いている。

「私は本米の愚を守つて愚に生きるほかなし、愚を生かすよりほかになし」と、己の真実を見、禪僧耕畠の惡夢から解き放たれ、疑はなにもなかつた。ただ、禪僧耕畠の幻想の残滓、残りかかる碎かれたのではなくして、自ら碎いてしまつたのだ。見よ、碎け散つた破片が白日に曝されてこそを掲いでいる。

山頭火は長い模索の末に、遂に、自らの実像にめぐり会うのである。ここで書けば破戒は成り立たない。山頭火においてそんなものはなにもなかつた。ただ、禪僧耕畠の幻想の残滓、残りかかる碎かれたのではなくして、自ら碎いてしまつたのだ。見よ、碎け散つた破片が白日に曝されてこそを掲いでいる。

山頭火は長い模索の末に、遂に、自らの実像にめぐり会うのである。ここで書けば破戒は成り立たない。山頭火においてそんなものはなにもなかつた。ただ、禪僧耕畠の幻想の残滓、残りかかる碎かれたのではなくして、自ら碎いてしまつたのだ。見よ、碎け散つた破片が白日に曝されてこそを掲いでいる。

山頭火のぐうたらは、まさに、異邦人であり、その彪大な愚かしき行乞記は、読む者にとって、そのまま非日常の旅である。そして、それは、むなし日常的生活空間の人生に、カタルシスとして作用する。

現代の中流階級意識が、その繁榮とそれ故の不安・孤独感が併存する限り、そして、流転、彷徨、漂泊が日本人にとって失意落魄の精神を支えてくれる一つの柱である限り、山頭火のぐうたらは、いつの時代にも、われわれにかかわりあつてくるのである。

種田山頭火の漂泊



特集 種田山頭火の旅・人生・酒浪

徳間康快 vs 松坂慶子

YASUYOSHI TOKUMA KEIKO MATSUZAKA

FRAGRANCE
OF
SPIRITS
AND
TALKS

YASUYOSHI TOKUMA KEIKO MATSUZAKA

「上海パンスキング」のまどか役から「春の波濤」の貞奴役へ。今度はどんな女性を演じてくれるのか楽しみにしてます。(徳間)

ジャズダンスと歌にかわって、今は日本舞踊と鼓、お三味線のお稽古に励んでいます。(松坂)



「芸者から女優そして女実業家になっていく女の一生を演じるんです」

松坂——新年あけましておめでとうござります。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

徳間——おおうこうよろしく。新年早々、

松坂さんをお迎えてきて、大変うれしく思っています。三年ぶりですか、この対談は

二度目になるんですね。

松坂——はい、昭和五十七年に一度。そのときも、たぶんお正月だったんじゃないかな

徳間——もう、あれから三年もたつんです

松坂さんをお迎えてきて、大変うれしく思っています。三年ぶりですか、この対談は

二度目になるんですね。

松坂——明治が舞台なんですが、私は霞

の芸者、貞奴の役なんです。ほかに川上音

一郎、岩崎桃介、桃介の妻子が主な役と

ころで、この四人が十代のころから話は始

まります。

徳間——杉本苑子さんの原作は『京府回廊』

というタイトルですが、そのマダム貞奴の

役を松坂さんがなさるわけだ。

藤博文に水揚げされて、岩崎桃介との初恋

があり、それに破れて……。桃介は、その

後に福沢諭吉の養子になるんです。そして、

川上音一郎と結婚して、二人でオッペケペ

一座をつくつて外国へ渡るんですが、そ

こで思いがけなく女優になってしまって

すよね。のちのち、日本に帰ってきてから

女優第一号と呼ばれるようになるんですけど

ね。それで、桃介との縁も深くて、音一郎が亡くなつたあと、再会して事業を助けるようにならんです。芸者から女優になり、女実業家になっていく、波瀬にとんだ女の一生を演じるわけなんです。

徳間——大河ドラマの主人公を女性にした

松坂——ありがとうございます。

徳間——パリのロケはいかがでしたか。

松坂——着物と鹿鳴館時代のドレスの両方着たんですが、パリではドレスのほうがみ

なさん喜んでくださいましたね。やはり懐かしいという感じで。

徳間——それに、あのころのは豪華だから。

松坂——一九〇〇年のパリ万博のときに建

てられたアレキサンドル三世橋でもロケし

たんですねけれど、そのころやつと政界の方

方が渡仏されたころなのに、貞奴と音一郎

もパリに行っちゃうんですね。無鉄砲とい

うか、勇気があるあなたね、感心しま

したね。原作を読むと、音一郎の人となり

たのが、どこかつかこうへいさんを思

い出させるんですよ(笑)。

徳間——貞奴と音一郎がパリに渡ったのはいつでした。

松坂——一九〇〇年です。

徳間——ということ、ちょうど八十五年前か

ながら、その裏側に現代の女性のあるべき姿が見え隠れしている。そういう意味で、

どんな女性に仕立していくのか、松坂さん

の役づくりにかかわってくるわけだ。期待

していますよ。



徳間康快

大正10年10月25日、神奈川県横須賀市生まれ。早稲田大学卒。読売新聞本社記者を経て、徳間書店、大映、徳間ジャパン、東京タイムズ社など、23社を主宰、経営する。



徳間康快

松坂——はい、それはもう。ですから、この役をするにあたって、私はあまり気の強いほうではないのですから、それがいちばん大変でした。

徳間——でも、似ているところもあるんじゃないかな。一念を燃やすと、とことん演技に集中してやっていくでしょう。

松坂——そういうところはあるんですね。今度は日本舞踊のお稽古を始めたんですよ。鼓とお三味線も。そういう芸事を通じて自分を鍛えましてね。この貞奴の役を一年間やり通そうと思っています。

徳間——日舞は何流ですか?

松坂——藤間流の宝家の康詞さんのところに通っています。波町はもともと藤間流で、ドラマの中の振り付けも全部やつていただいている。

徳間——鼓は?

松坂——以前から田中傳左衛門先生に教えてもらっているんです。

徳間——それに三味線も?

松坂——以前、「雪国」のときに三味線を



松坂慶子(女優)

昭和27年7月20日、東京都生まれ。昭和47年、映画「辻ヶ花」でデビュー。翌年、テレビ番組「若い人」に出演する。映画では「事件」、「青春の門」、「蒲田行進曲」などを経て、昭和59年「上海パンスキング」でのりにのった演技を披露、慶子ファンの層を広げた。昭和56年度報知映画賞主演女優賞、第24回ブルーリボン賞主演女優賞など数多く受賞、名実ともに当代を代表する大女優。テレビでも、レオタード姿が話題を集めた「水中花」や平岩弓枝の「ふたりぼっち」などに主演。今年度のNHK大河ドラマ「春の波瀬」にマダム貞奴役で主演中。明治・大正の時代を奔放に生き抜いた波瀬万丈の女性の一生をみごとに好演している。



大正7年、貞奴が芸界引退記念に自作の句を焼きつけて配り物とした茶碗。
「兎も角も隠れ住むべく野ぎくかな」とある。
(布留川貞夫氏所蔵)



馬車でアレキサンドル三世橋を渡る貞奴と音二郎(中村雅俊)。NHKドラマ「春の波瀬」より



遊戯場で走る桃介(風間杜夫)と応援する貞奴。NHKドラマ「春の波瀬」より

“人々もお料理も、中国つ
すばらしいところですね”

徳間——松坂さんと中国とのかかわり合い
は、いつからですか。

松坂——三年前、いえその前の年になりますか。天津で日本映画のロードショーをしてきたときに行つたのが初めてです。

徳間——三年前、桂林、昆明で日本映画祭があつたときも行つてもらいましたよね。

松坂——はい、その次が一昨年。ロケーションのために上海に行きました。

徳間——「蒲田行進曲」が三年前に上海で上演されているから、むこうの人たちもみんなのことを知っていたんじゃないですか。

松坂——ええ、おかげさまで「上海パンスキング」のロケーションもスムーズでしたし、上海の方たちも歓迎してくれて、楽しめました。

徳間——中国語の松坂慶子を、上手ですね。

松坂——さすがに中国の声優さんって、お手手ですね。

徳間——中国の声優は世界で一番うまいんですよ。感情こめてやるでしょ。

“ほんと、正確ですね。”

徳間——中国の料理や酒について、くわしくなれたと思うんですが。昆明の華僑麵とか桂林の狸とかね。上海ではかにを食べましたか。

松坂——はい。十月は雄で、十一月は雌がおいしいんですね。あちらでは西北の風が吹くと、かにの季節だとかいって、「西北の風が吹きましたか」というのが、あいさつがわりのようになつてますね。ちょうど上海がにの名産地、陽澄湖のそばまで行ったんですけど、さすが水がきれいなところで、田園風景が広がっていて、蘇州はすばらしいところでした。

徳間——今まで食べた中国料理の中で、きわめつけつていうと何ですか。

松坂——そろです。大連で食べた、殻に入つたレアの焼きうに、あれ、おいしかつたですね。それですが、朝粥がどこでただしてもおいしくて、私、最高七杯も食べました。

徳間——中国語の松坂慶子を、

松坂——茅台酒ね。茅台酒にもずいぶん強くなりましたが、中国のアイスクリームつておいしいですよ。お食事の最後に

ひくシーンがありましてね。そのとき実演しましたので少しは習ったことがあるんですが、今回は本格的に思っています。

徳間——ああ、駒子役のときにはね。

松坂——去年は「上海パンスキング」で、好きなジャズダンスや歌を思う存分やらせてもらいましたが、俳優さんでも歌い手さんでも、えらいと思うんです。私のところ(徳間ジャパン)の五木ひろしもね、モダンダンスはするし、日舞もやる。

徳間——松坂さんももうすぐですが、俳優さんでも歌い手さんでも、えらいと思うんです。私のところ(徳間ジャパン)の五木ひろしもね、モダンダンスはするし、日舞もやる。

「座頭市」の振り付けをするのに、日舞を一からやっている。座頭市を演らせてたら勝新太郎か彼か、ってところまで努力していますよ。職業とはいながら、我々からは想像もつかないようなことをやっていますよね。たいしたものだと思います。こうやって一流の座を獲得するんだろうし、維持するんでしょう。あなたも、あれだけ激しい踊りをやつたんだから、大変だったでしょうね。

徳間——腰、痛めませんでしたか。

松坂——ええ、疲れましたね。

徳間——腰痛めませんでしたか。

松坂——子供のころ、クラシックバレエを習つてましてね。そのころから踊ることが好きなんですね。

徳間——ところで、そろそろ乾杯といませんか。本日のメニューは、新高輪プリンホテルのシェフ、小川清六さんの手によるもので、松坂さんとの新春対談にふさわしいものをということで、とり合わせてくださつたんですよ。先ほどメニューを見せてもらいましたら、このフレッシュ伊勢えびのカクテルに統いて、フォアグラのティリースのゼリーがけ、赤・青ビーマンのサーモンのムース詰め、かにと野菜のマヨネーズあえ、季節サラダ、かきのシャンパン蒸し、ラム・フィレ肉のパイ包み焼き、フルーツと出てまいります。

松坂——まあ、おいしい伊勢えびですね。

私のために、うれしいわ。

徳間——合わせた赤ワインはシャトー・オーブリオンの一九七四年もの。実にまろやかで、飲みごろですね。シャンパンはドンペリニヨン。ここソムリエの小飼二雄さんがサーアップしてくれます。

松坂——いい口あたりのワインですね。

松坂——恥ずかしいので黙っていましたが、やりましたね(笑)。軟骨がずれちゃいました……。

徳間——共演した志穂美恵子さんはアクション映画で慣れますけどね。ずいぶん前に、タシケントで開催されたロシア映画祭に同行してもらつたことがあります。

松坂——悦ちゃんは樂だつた(笑)。アクション映画に比べたら、ほんと樂だつたついてました。

徳間——彼女も徳間ジャパンの専属で、歌手としても活躍してますね。ずいぶん前、タシケントで開催されたロシア映画祭に同行してもらつたことがあります。

松坂——悦ちゃんは樂だつた(笑)。アクション映画に比べたら、ほんと樂だつたついてました。

徳間——彼女も徳間ジャパンの専属で、歌

手としても活躍してますね。ずいぶん前、タシケントで開催されたロシア映画祭に同行してもらつたことがあります。

松坂——悦ちゃんは樂だつた(笑)。アクション映画に比べたら、ほんと樂だつたついてました。

徳間——志穂美恵子さんはアクション映画で慣れますけどね。ずいぶん前、タシケントで開催されたロシア映

画祭に同行してもらつたことがあります。

松坂——悦ちゃんは樂だつた(笑)。アクション映画に比べたら、ほんと樂だつたついてました。

徳間——志穂美恵子さんはアクシ

ョン映画で慣れますけどね。ずいぶん前に、タシケントで開催されたロシア映

画祭に同行してもらつたことがあります。

松坂——悦ちゃんは樂だつた(笑)。アクション映画に比べたら、ほんと樂だつたついてました。

徳間——志穂美恵子さんはアクシ

ョン映画で慣れますけどね。ずいぶん前、タシケントで開催されたロシア映

画祭に同行してもらつたことがあります。

松坂——悦ちゃんは樂だつた(笑)。アクション映画に比べたら、ほんと樂だつたついてました。

</



出てくるんですけれど、それに茅台酒をかけて食べると、これがまた、いいんです。德間——えつ、アイスクリームに茅台酒をかけるの!?

松坂——ええ、おいしいんです。それとやっぱり、あの丸いテーブルでワイワイ食べるのが、味をひきたてるんじやないでしょうか。

德間——そう。中国は常に丸いテーブルで、上下の区別なく食べるでしょう。あれはいね。

松坂——前に北京でも盛大なお食事、ありましたね。

德間——ああ、「松坂慶子を北京に呼ぶ会」の第一回の会合でしたか。あれ、もう、ずいぶん前でしょ。第二回はまだかつて、北京の日本企業の駐在支社三百八十二社の会員から、催促されていますよ。

松坂——上海ロケのときに、メンバーの中

のお一人で、毎日新聞記者の今田好彦さんが、上海までインタビューに来てくれました。久々ぶりにお話ししましたよ。

松坂——それと、みんなへんに遠慮して引ばられると思うんですね。

「一人でも、うんと夢中になつている人がいると、みんながその人に引ばられると思うんですね。」

德間——映画製作中に、この映画はあたるんじゃないかというようなことを感じることはありませんか。

松坂——そうですね。これはわからないことでですね。ただ、一つ感じるのは、現場でスタッフの方と俳優との間に和ができるきていて、和氣あいあい、厳しいときは厳しいなりに、楽しいときは楽しく、その熱気みたいなものがいい作品は、どうも、うまくいかないんじゃないかな。というような気はしますね。

德間——やつぱり、みんなが本気にならな

らの高度情報化社会を分母にすると、分子が四つあるんです。一つは、人間中心の社会をつくっていかなければならないということ。「一番目が効率的な社会を設定して、それが十分に稼動していかなければならぬこと。二番目が、地域社会は自立した番目が、国際化された交流社会を日本人がつくりあげていかなければならぬ。という四点なんですが、まあ、これと少しばかりわづてくると思うんですが、これから映画づくりをしていくうえで大切なのは、人間の心とか精神を尊重していくことだと思ふんですね。

松坂——ええ、そうだと思います。

德間——「蒲田行進曲」にしても、「上海パンスキング」にしても、ものすごく人間臭いでしょ、登場人物が。これは人間尊重につながることだと思つんですね。

松坂——徳間社長も「未完の対局」など、とても意義のある映画づくりをなさつていらっしゃるでしょう。とてもスケールが大きくて、男のロマンがあるなと思っているんです。

德間——いま製作中の「敦煌」は、製作費も三十五億かけましてね。まあ、数字だけでなくスケールも「アラビアのロレンス」以上と自負しています(笑)。

松坂——最近ね、ロマンのスケールが小さくなってきてますでしょ。その点、すごいと思います。全世界から俳優さんを集めるんだそうですね。楽しみだわ。

「カクテル・ケイコ」のお味はいかがですか。

德間——前回、ステア対談に出ていたときに、ホテルのバーはちょっと女性に



は入りにくい感じがする、といわれてしまたが、その後、利用される回数は増えました。

松坂——好きなお酒がドライシエリーとマルガリータというのは変わりませんか。

松坂——ええ、変わっていませんね。

德間——あのときは、松坂さんに似合ったカクテルを持つべきだという話になり、「カクテル・ケイコ」と名付けようということになりました。

松坂——残念ながら、まだいたたいてないんですね。

德間——それは、今、さつそくつまらまいましょう。「マルガリータ風レモンのきいた、紫色のカクテル」という注文でしたね。レシピを書いてもらいましたのでお教えしましょう。ジンをベースに、パフェ・ア・ムール(クレム・ド・バイオレット)とレモンジュースを加え、グラスの縁に塗をつけてスノースタイルのグラスにそそぐ……。

松坂——まあ、うれしいわ。

德間——それでは、もう一度「カクテル・ケイコ」で乾杯しましよう。乾杯!

松坂——乾杯。紫の色がとても淡くて、おいしいカクテルですね。大切にします。

德間——今年も大活躍されることと思いますが、健康に気をつけて、マダム貴殿、一年間頑張ってください。

松坂——ありがとうございます。私も、徳間社長のロマンの集大成としての「敦煌」に期待しています。

いとだめだということでしょうね。

松坂——そうですね。

松坂——全体がなんとなくチグハグだな、というところもあるでしょう。

松坂——それと、みんなへんに遠慮しておるなというのはいけないと思います。お互いが素顔を出して、心を裸にしてぶつかり合つていくくらいにならないと、手ごたえを感じませんね。

德間——相手役と息が合うというのもありますね。相手役と息が合うというのもありますね。

松坂——そうですね。相手の方が役になりますけど、京都だとか地方に仕事に出かけたときには、軽い食事が出て、飲めて、みたいなバーはよく利用するようになります。

松坂——こちらが頑張ると相手はどうですか。ちやう。渥美清さんとか、風間杜夫さんはとても的確な演技をなさるから、ついひき込まれますね。

德間——こちらが頑張ると相手はどうですか。松坂——どちらかがテンションを上げて頑張っていると、お互に頑張れるということ

十八世紀ヨーロッパの旅

立教大学講師(比較文化論) 本城靖久

放
特集 RUN ABOUT
浪

西部劇の映画では、インディアンに追われた駅馬車が砂塵をまき上げて猛烈なスピードで逃走するシーンをよく見かけるが、昔の馬車はどの程度のスピードで走っていたのだろうか。

一七八六年ゲーテが郵便馬車でイタリアに向かったとき、ドイツとイタリアの国境をなすブレナーベルをくだるさまを、「どの駕者も、目がくらみ耳がつんぱになるほど走らせた」(高木久雄訳)と形容している。飛ぶような高速で坂道をかけ下ったとの印象を授けるが、高市鶴氏の計算によると、九〇キロをカバーするのに十四時間もかかっているので、途中の休憩を考慮しても、せいぜい時速一キロくらいのことである。なんのことない、自転車でノンビリ走っている程度の速さでしかない。

なにふん当時の馬車の車輪は木製で、その上に鉄のベルトを巻いて補強しただけのもの。走るときには、ガラガラと相手やかましかつたはずである。それに馬の蹄の音や御者のふりおろす鞭の音も加わり、にぎやかというか大変な騒音であったと思われる。道路にしても、ヨーロッパーとほめたたえられたフランスの幹線道路のように、中央部を切石で舗装されているのは例外で、ほとんど深いわだちや穴ぼこ、岩石が数知れぬほどあるひどい代物。道路といふよりは、道路予定地と呼ぶべきものである。従って、こうした道をいく馬車の振動や揺れは大変なものであり、車輪の騒音とあいまって、たいしたスピードが出ていないとも、大変な高速で走っているような印象を与えたのである。

なにしろ昔も今も道路の整備は高くつく。そこで中央政府の権力が強大で、しかも富んでいるフランスのような大国ならいざしらず、イタリアやドイツのように多くの小国が群立している所では、道路整備のよう、金がかかる割には地味な分野は放つたらかしというのが普通だった。たのは、當時としては当然の用心である。

ナボリ街道の治安状態が悪かつたことは、モーツアルトとナボリにおもむく前に、レオポルトがローマから出した手紙(一七七〇年四月二八日)からわかる。



ナボリへの道中は一晩間前からとても物騒で、さる商人が殺されました(中略)警官と盗賊が三人殺され、四人の盗賊がつかり、ほかの連中は散りぢりはらばらになりました。(中略)安全だとわからなければ当地からは出発しないし、駅馬車でなら大勢の人たちといっしょで出發しない。(海老沢敏、高橋英郎訳)

いくら物騒であるにしても、五十もの火器で武装しているとは、カザノヴァも少々オーバーではないかと思う人も

ということは、当時の詩人が馬車のことを、「身体全体の堪えがない拷問、恐るべき残酷な乗物」と歌っていることが、最も想像がつこうというものである。なかでも悪路で名高いドイツにおいては、「骨鋼造りの腕、銅製のはらわた、アラチナのおしりを持たない人」(関 捕生訳)は、馬車で旅行しないほうがいいと、十九世紀初頭になつても忠告されるほどひとだった。

そこでヨーロッパ中を演習旅行で旅して回り、悪路には慣れているはずのモーツアルトをさえ、一七八〇年一月にオペラ「イドメネーオ」の上演準備のためザルツブルクからミュンヘンに旅したときには、「今後ぼくは、駅馬車に乗るよりは、むしろ歩くのを常例とします」(柴田治三郎訳)と父レオポルトあの手紙の中で述べているほど、ドイツでの駅馬車の旅にはウンザリしている。

道路が整備されていないのだから、馬車の乗り心地がよくなはないのは当然だが、その程度ですんていれば神に感謝しなければなるまい。なにしろ悪路をとばしていくと、事故がよく起きる。穴に車輪をとられて、あるいは車台をつぶっている革のベルトが切れ、また軸が折れたりして、馬車がひっくり返るのは日常茶飯事であった。

イタリアを巡回中のモーツアルト親子もナボリからローマに向かう途中で事故にあっている。父親レオポルトの手紙から紹介しよう。一七七〇年六月三〇日の手紙である。

「ローマに着く前」の最後の宿駅で、御者は、棒の間にいて二輪馬車を背中で引いている馬に鞭を入れました。馬は高く立ち上がり、二千センチ以上もある砂埃のなかで脚をもつれさせ、激しく横倒しに倒れましたが、そのおかげで、馬車の前の部分をいつしょに引き倒してしまいました。

ローマに着く前の最後の宿駅で、御者は、棒の間にいて二輪馬車を背中で引いている馬に鞭を入れました。馬は高く立ち上がり、二千センチ以上もある砂埃のなかで脚をもつれさせ、激しく横倒しに倒れましたが、そのおかげで、馬車の前の部分をいつしょに引き倒してしまいました。

カザノヴァは四頭立ての馬車で夜道を旅していたが、車軸が折れたため、馬車は転覆。同乗していた神父は左腕を捻挫したが、カザノヴァは眠りこんでいたのに、怪我ひとつのベテン師として知られているが、じつはこの女好きの冒險家は数学者としても、文学者としても当代一流のレベルに達していた天才であることが今日では判明している。

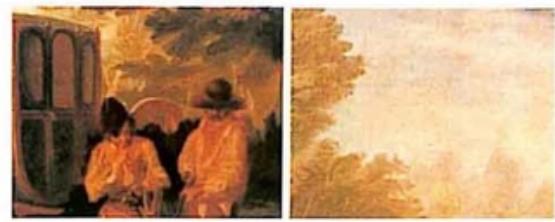
彼は一七六一年にナボリ街道で事故にあってはいる。カザノヴァは四頭立ての馬車で夜道を旅していたが、車軸が折れたため、馬車は転覆。同乗していた神父は左腕を捻挫したが、カザノヴァは眠りこんでいたのに、怪我ひとつしなかつた。彼自身の言葉によると、転覆には慣れていたため、馬車の中での座り方にコツがあるとのことである。

興味深いのは、馬車が転覆した後のカザノヴァの対応である。御者が二人とも逃げてしまつたので、街道に果食う盜賊に知らせに行つたのかもしれない。そこで召使いに、金を持って近辺の武装した農民を呼び集めに行かせるとともに、盜賊が襲ってきたときこそなえて、「四頭の馬をはずし、車輪や棍棒につないで輪をつくつた。それから…火器五丁を持って馬たちのうしろに身をかくした」(柴田般彌訳)。

しかしこんな危険をおかして馬車を走らせたのは、金貨のギッシリつまつた財布をひとつしか持つていなかつたためと『回想録』の中に記している。後年イギリスを訪れたカザノヴァは、イギリスでは財布を一つ持つて旅するのが常識だと教えられて、スッカリ感心している。つまり盜賊に襲われたときに与える財布をかならず用意しておけといふことである。現代のニューヨークっ子が、ホールドアップにそなえて、出しやすいポケットにいつも四、五〇ドルの紙幣を入れておくのと変わらない。

しかし現代の強盗よりも、昔の盗賊のほうが割が悪かったようである。なにしろ、当時は金や銀のコインが用いられていたが、偽造の硬貨もよく出回っていた。そこで、つかまされた偽造の金貨や銀貨をためておき、これを盜賊用の財布にギッシリ入れておくということをおこなわれていたらしい。まったくの話、せつかく生命がけで奪つた財布の中身がすべて偽造の通貨というのでは、盗賊もたまつたものではない。

当時のガイド・ブックに目を通すと、十八世紀の旅がいかに危険なものであったか、容易に理解することができる。一七八三年にドイツのワイマールで、ハンス・オットカル・ライハルトなる宮廷人とベルヒトルト公爵の手による『旅行者心得』が出版された。全ヨーロッパの貴族階級の共通語であるフランス語で書かれたこの旅行案内書によるところである。この勧告は旅が危険であつたことと無縁ではあるまい。



しろに乗せてやつてはいけないとある。特にイタリアではやらないようにと強調されている。なにしろこうした無思慮な親切心をだしたばかりに、生命を失った旅人は何人もいるからである。

なお旅先で知りあつた他人とあまり親しくなりすぎないようになると忠告している。相手が盜賊であるかペテン師であるかわかつたものではない。相手の名前とか、旅の目的、滞在日数というたぐいの質問をすると、相手に同様の質問をするチャンスを与えることになり用心のこと。もつともこうした質問には、正確に返答すべきではないとも述べている。

また旅行中に、宝石をもつてることを人に知らせるのは馬鹿げた虚榮でしかない。宝石の指輪、金の喫煙草入れ、素晴らしい時計などのために生命を失つた旅人はいるわけだし、宿屋の主人に宿代をばられる原因にもなると同書は注意している。当時の貴族たちは、喫煙草を入れておく携帯用の容器や携中時計に大金を投じるのが普通だった。金で作られ、多くの宝石をちりばめたり、あるいは一流の画家が細密画を描いているので、小さな喫煙草入れに労働者の日給数カ月分に相当する値段がついていた。そんな物を見せびらかせば、盗賊に狙われてもおかしくはない。

なお宿屋の主人に宿代を吹つかれられるというのは、当時は品物やサービスの値段は定価制ではなく、今日の中近東と同じく、客の風体をみて売り手が自由に決めていたためである。そこで金持ちや貴族は、いつも相場よりもかな



り高い宿代を払わされていたという次第。

いくら吹つかれても、庶民を相手に値引きを交渉するなどというのは、貴族の身分にふさわしくない行為である。腹の中でどう思つたかは別として、請求された金額をそのまま支払うというのが普通だつたらしい。

もっともあまりに高い宿代を吹つかけると、主人の強欲ぶりを宣伝することになり、旅人はそのような宿屋はさておきになるので、あまり欲張るのは賢明ではない。ただ、競争相手のいない田舎の宿屋となると、安心してぼれるので、食事もワインもベッドも最低なのに、宿代だけは超一流だということがしばしば起きている。

十八世紀のヨーロッパで最もよく旅した国民は衆目の一致するところイギリス人だが、イギリスからの旅人は、大陸諸国宿については、あまりよい点をあげていない。パリ、フランクフルト、ワイン、ヴェネチア、ローマ、ナポリのようないい田舎の宿については、さすがに不満の声は聞かれないと、田舎の宿はいずれも厳しく批判されている。最大の不満の種は、宿が不潔だということで、特にイタリアやドイツでは寝具持参で旅するのが普通であった。前夜に泊まつた人から梅毒でも染されてはかなないので、前述の旅行案内書は寝具としては次のワンセットを持参するよう推めている。「絹の軽い掛け布一枚、シーツ一枚、長さ約二二〇センチ、幅約一〇センチほどの白くなめした鹿の皮を合わせたもの」。

宿屋に着くと、ベッドに置かれてる敷き布団や羽布団

の上にこの鹿の皮を広げ、その上にシーツと掛け布団を置くようにとのことである。これだけでは寒いときには、外套を掛け布団の上に広げることになる。

寝具一式もつて旅するには、自家用馬車で移動する貴族

にとつては、痛くもかゆくもない。寝具どころかベッドまことにだろうが、当時の田舎宿のベッドは南京虫、ノミ、ダニといった害虫の巣であつたから、これは賢明な措置と

いうべきであろう。思いおこせば、日本においても田舎宿でノミや南京虫の攻撃を受けなくなつたのは、第一次大戦後のことではない。殺虫剤DDTの普及のおかげである。

十八世紀のヨーロッパを旅する人たちが、どんなにこうした害虫に悩まされたかは、容易に想像できようというものが、

から南仏のニースまで旅したが、こうした毒虫のことを、「我々が泊まつたすべての宿の正当な住民——もつとも長期にわたる占有が権利を与えるとしてのことだが——」と書き残している。宿に泊まるたびに毒虫の被害にあつたわけである。彼は自分の馬車で旅していたのだが、一家三人のベッドをのせる余裕はなかつたものらしい。

私のように、ノミや蚊が一匹でもいると、捕まえるまで二匹ではなく、何十匹、何百匹という大群で襲つてくるのが、

だから始末におえないと、

私の知つている最高記録は、三百の滞在中に四百六十匹の南京虫を殺したというもので、一七八五年の八月にフランスの港町ナントを訪れたクラドック夫人の日記に記されている。もつとも本人が殺したわけではなく、自分の小間使いに命じて、ベッドをバラバラに解体したうえで、殲滅させたものではあるが、すさまじいものである。

いずれにしても、ベッドや寝具一式を馬車に積んで旅するのでなければ、毒虫のうじやうじやいるベッドに寝るこ

となる。虫に一晩中悩まされるがいやな人は、外套に身をくるんで、テーブルの上で一夜をすごしたりもするが、そのほうがはるかに快適に眠れるということである。当たり前というしかない。

このように十八世紀の旅は難行苦行の連続であつたが、それにもかかわらず、旅人の数は増える一方。これはひとつには、小氷河期の再来を思わせるほど寒かつた十七世紀と比較して気候が温暖になつたこととか、前の世紀よりも平和が各地で続き、人ひとの生活水準も向上したうえ、ヨーロッパの全貴族階級がフランス語を話し、フランス文化の摸倣に一所懸命であるというように、ヨーロッパの貴族の間には同一の文化共同体に属しているという意識があつたことなど、旅に有利な環境が存在していたためといえよう。しかも少しずつはあるが、道路は整備されだし、鉄道の発達の導入というように馬車も改良され、乗り心地も改善されつつあった。

こうした時代であればこそ、天才音楽家モーツアルトは幼少の頃から、ドイツ、オーストリア、イタリア、ベルギー、フランス、イギリスといった国々の王侯貴族を相手に巡業の旅を続けることができたのである。カサノヴァとしても、東はトルコの首都イスタンブール、西はスペインの首都マドリード、北はロシアの首都ペテルブルグというように、ヨーロッパ全土を股にかけて活躍しているが、彼の「回憶録」を読んで呆れ返るのは、カサノヴァがおもむく先々で、よく旧知の人間に再会していることである。再会する相手は、詐欺師やゴロツキであつたり、かつて愛し合つた歌姫や踊り子であつたり、あるいは友人の貴族であつたりするが、当時のヨーロッパ人の行動範囲が非常に拡大しているさまがよくわかる。

いずれにしても、平均時速が歩行者のスピードより少しましな程度という馬車や帆船でヨーロッパ全土を移動していたのだから、当時のヨーロッパ人は実にタフなものである。こうした先人の旅の苦労を思いおこせば、列車や航空機が少々遅れたからといって、イライラしなくてもすむのではないかろうか。まったく二十世紀の我々は、甘やかされすぎているというべきであろう。



放
特集 RUN ABOUT
浪



E | D

D:カブリー・プラザ・ホテルの入口
E:ホテルの外観
F:カブリーズ・バーのカウンター



A:アラン・トレメイン氏

(マネージング・ディレクター)

B:ビル・ハック氏

(フード&ビバレッジディレクター)

C:アル・アレックス氏

(プラザ・バー、バーテンダー)



“プラザ・バー”

カブリー・プラザ・ホテル、ボストン
"PLAZA BAR" COBLEY PLAZA HOTEL, BOSTON

過^あぎし日の、安らぎの "Grand Dame"復活

ボストンの古婦人"Old Grand Dame of Boston"と呼ばれるカブリー・プラザ・ホテルは、バック・ベイ地区カブリー広場の一角にあるボストンで最も古いホテルである。

近隣には一八七七年建造のトリニティ教会、イタリア・ルネサンス建築のボストン図書館が並ぶ一方で、六十階建ての近代建築、ジョン・ハンコック・タワーがそびえ立つ。アメリカ建国の歴史を刻む町、ボストンならではの新旧とりませた光景が織り広げられる。

カブリー・プラザ・ホテルは一九一二年オープンした。設計にはニューヨークのプラザ・ホテルを手がけたヘンリー・H・ハーデンバーグがあり、「ボストンの最もボストンらしい場所」として、現在の地にオープンした。

カブリー・プラザ・ホテルを手がけたヘンリー・H・ハーデンバーグがあり、「ボストンの最もボストンらしい場所」として、現在の地にオープンした。

カブリー・プラザ・エティのステイタスでもあった英國流を守つた典型的なグランド・ホテル・スタイルである。

グランド・ホテル・スタイルとは周知のように、入口に入るところがグランド・フロアといわれるロビー階になつておらず、その上の階を一階とし、二階、三階とフロアが重なるという点で、ロビー階を二階と扱う日本等の概念のホテルと異なる。

古きよき時代の英國では、ホテルのグランド・フロアに特別な意味をもたせ、独自の意匠を凝らし、そこに集う人々もまた、グランド・フロアをこのうえない社交の場とおもえていたことがうかがえる。

二十世紀初頭のアメリカでは、ひとつ旅をするにも長い時間列車に乗らなければならなかつたから、到着すると、ひと所にしばらく滞在するという長期滞在型の旅行者が多かつた。従つて、ホテルを単なる宿泊所としてだけでなく、贅沢が味わえて自分の家のような安らぎのある、その上、當連客の顔と名前をマネジャーが覚えてくれているような、そんなグランド・ホテルの全盛期であった。

しかし、時代が進むにしたがつて、機能的でモダンなホテル、チエン・展開を誇るホテルが台頭し、一九四〇年代後半から三十年ほどの間に、多くのグランド・ホテルが廃業、もしくは完却の憂き目にあつたりしている。カブリー・プラザ・ホテルもその七十余年の歴史をふり返ると、また例外ではなく、惜しいことに大理石やマホガニーがほこりの下に眠つている時代もあつたといふ。

一九七三年、経営を引き継いだアラン・トレメイン氏はまず、過ぎし日の、安らぎのボストンの「家」をとりもどさうと考えた。ハンドメイドのモザイク模様を覆つていたカーペットをはぎとり、レリーフのあるドーム型天井を隠していた音響用タイルをはずし……。そうしてオールド・スタイルが息を返さ近したのである。

アラン・トレメイン氏による大手術のいい酒をつくるバー、テンダードと

うまいジャズがある、プラザ・バー

アラン・トレメイン氏によると、

「我々のホテルの成功の鍵は、バーとレス

トラン、そしてティールームが握つてゐる」

「アーリー・ゴーランド・ルームの時代から三十五年のあいだに築いた、信用と、もてなしの心構え、ほどよい礼儀作法をわきまえた彼のふるまいは古きよき伝統を体得した姿そのままである。

名物のようひとつが、現代の最も偉大な白人ピアニストの一人と称される、デイヴ・マッケナの生演奏である。

ナイト・タイム・ジャズの常識を頑固に守り、'40年代のものや、スイングやモダンでも'50年代のものに曲目は絞られている。

他に、サミー・ブライス、ジョナ・ジョンソンズなどときおり顔をみせ、ここでプレイヤーを集めてジョイントすることもある。

アール・ファサ・ハイinzも當連のひとりであつたが、昨年、ここを最後のステージとして去つた。

ボストン在住のミュージシャンや音楽関係者もピアノを聴きに、よくやつてくる。

オープブルは午後五時から午後七時まで、

客の間をまわるワゴンの中から、スマーキ

ド・オイスター・スコティッシュ・エッグなど十六種類を自由に選べるシステムになつてゐる。

カクテルは最後のひと口まで冷たいま



飲めるようにと、氷で冷やしたデカンタ入りで出てくる。これはプラザ・バーだけのサービスだ。

スタッフや家族の似顔絵の飾られたカブリーズ

プラザ・バーがある程度、地位を榮きあげた人たちに似合うとすれば、こちらはその子孫の青年向きとでもいおうか、カブリーズはプラザ・バーよりもやや若向きの大いバしてある。商社マンや銀行家、秘書などが男女を問わず集まつてくる。

フロアの中央に大きな三百六十度のカウンターが位置し、まわりにはテーブル席が七つされている。しかし、カウンターではほとんど人が立つたまま、話をしたりグラスをかたむけたりしている光景は、いかにもアメリカのバーらしい。テーブル席はカップル用といったところだろう。

テーブル席の壁にかけられたさまざまの名画もすばらしが、カウンターのまわりの壁にはこのホテルで働くスタッフやその家族の似顔絵が直接描かれていて、アトホームなホテルの雰囲気が伝わってくる。

バからロビーに向かって歩いていくと今度は額におさまった似顔絵が四十枚もかけられている。こちらはここを訪れた有名人の顔で、エドワード・ケネディ、エリザベス・テーラー、プロ・バスケット、ボストン・セルティックスのラリー・バードなどアメリカの各シーンを代表する著名人が並んでいる。

メイン・ダイニングであるカフェ・プラザの入口にある、小ぢんまりとしたライブラリー・バーも渋好みの通人のバーとして知られている。

カウンターはなく革張りの椅子のみで、

の押し合ひへし合ひが絶えなかつた。プラザ・バーでデイヴ・ブルーベックのピアノに合わせて、一族で歌をうたつた。などなど話の種は尽きないようだ。アメリカ人の心情にあるケネディ家の敬愛とともにカブリリー・プラザ・ホテルの存在はその沖話

「ワイン・セラーにはボルドーを中心にして、一年間かかる収集された約六百種のワインが用意されています。主に個人で所有しているワイン・コレクションをコレクターの没後、買い受けるという方法で集められていますので、ワイン通ならのどから手が出るような貴重なものがまとまって手に入れるようなこともあります」

カリifornia産のものもシャルドネを始め、少しあるにはあるが、やはり、フランス料理の味を生かすのはなにをおいてもフランス・ワインということなのだろう。

ソムリエが今、勧めるのは一九七八年ものと一九八一年もの。そして、一九六一年のの中でも秀逸といわれているパロン・ラ・ローズは八十本に限り、用意があるそうだ。

そして、年に二回、一人三百ドルの会費で「ワインを楽しむ晩さん会」が催され、

の舞台としてくつきりと心に残っている。

一九八三年に開かれたホテル創立七十周年式典にはエドワード・ケネディの息子、エドワード・ケネディ Jr.も参列し、みんなの羨望を集めめた。

こうした山積みに加えて、大改装が功を奏してここ十年ほどの間に、それまで他のホテルに宿泊していたビジネスマンが少しずつカブリリー・プラザに移動はじめた。ビジネス・エリートのステータスとして、日本の商社マンの利用も増えてきたといわれている。

隣接するジョン・ハンコック・タワーの建主、ジョン・ハンコック生命保険会社が今はカブリリー・プラザ・ホテルの経営主体だが、もともとはニューヨークのプラザ・ホテルと所有権が一緒にいたといいきさつがある。

それで二つのホテルに共通するイニシア

ルPを背中合わせにしたシンボル・マークを正有しているわけである。

その名のごとく壁にはめ込まれた本棚には革の表紙が並ぶ落ち着いたバーである。夕食の前にひと口のアルコールで潤うのよ、お茶をいただきながらもの想いにふけるのもよしといった場所だ。

窓越しには、カブリリー広場に立つ山積止しきトリニティ教会がながめられ、一瞬、タイミングの客ともなると、ディナーのメニューもここで注文することもできる。

モービル・ガイドの四つ星ボストンのメイン・ダイニング・カブリエ・プラザ

十九世紀のヨーロッパを想起させてくれる。カブリエ・プラザは、本格的なフランス料理の店で、昨年度モービル・ガイドにおいても四つ星レストランに指定されている。

舌のこえたお客様に磨かれた料理もさることながら、ワイン・リストの豊富さに驚かされる。「多分ニューベンディング地では最も広い範囲の銘柄がそろっているのではないか」と語るトレメイン氏。

「ワイン・セラーにはボルドーを中心にして、一年間かかる収集された約六百種のワインが用意されています。主に個人で所有しているワイン・コレクションをコレクターの没後、買い受けるという方法で集められていますので、ワイン通ならのどから手が出るような貴重なものがまとまって手に入れるようなこともあります」

ボストンという土地柄、政治家の利用も多く、ウイリアム・タット以来、代々の大統領が宿泊した。英國をはじめとする上級関係者も訪れている。

もちろん、ケネディ家とのかかわりも深い。

カブリリー・プラザに泊まる」とだ」ボストンという土地柄、政治家の利用も多く、ウイリアム・タット以来、代々の大統領の祖父に当たるジョン・フィッツジエラルドは、ボストン市長であり、オーブニン

グ・バーには彼の名で多くの名士が集められた。またボストン時代の若き日のJ.

F・ケネディはよくフィッシュ・チャウダーを食べにきて、彼と握手しようとする人々

招かれた人に好評を博している。「ワインのほかにも、お酒に関する催しがしばしば行われる。

「たとえばスコッチに押されてボストンではあまり飲まれないバー・ボンをP.R.した。パ・ボン・デー・・・シャンパン・ウイーカー」と称して、シャンパンやスパークリング・クラムチャウダー・ステーキに加えて、ワインに親しむ催しなども行っています」とビル・ヘック氏。

レストラン・カブリーズは、アーリーアメリカン風スタイルのウェイターやウエイタレスが、エドワード朝の店内で、伝統的なニューアイラングランド料理を出しててくれる。

最近、新しいスタイルのイタリア料理も人気で、併せてイタリア・ワインの準備もある。

イースト・ロビーにあるビングとグリーンのカラフルな練りのラウンジは、「ティー・コート」である。やしの葉の下で、通りを行きかう人々をながめながらのアフタヌーン・ティが味わえる。朝食・昼食もこれ。ここサンドウイッチの味も上々と評判をとっているらしい。

「ボストンに滞在するということは、カブリリー・プラザに泊まる」とだ」ボストンという土地柄、政治家の利用も多く、ウイリアム・タット以来、代々の大統領が宿泊した。英國をはじめとする上級関係者も訪れている。

もちろん、ケネディ家とのかかわりも深い。カブリリーの壁にエドワード・ケネディの似顔絵があることは、すでに触れたが、そのかかわりは、一九二二年のオーブン当時にまでさかのばる。

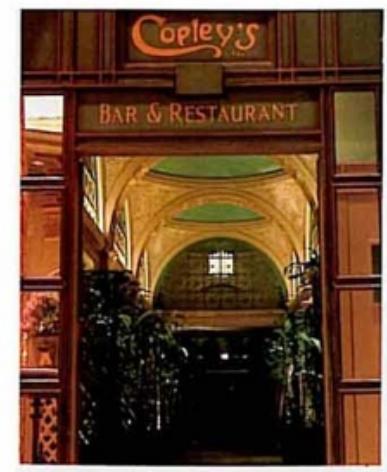
そのころ、故ジョン・F・ケネディ大統領の祖父に当たるジョン・フィッツジエラルドは、ボストン市長であり、オーブニング・バーには彼の名で多くの名士が集められた。またボストン時代の若き日のJ.F・ケネディはよくフィッシュ・チャウダーを食べにきて、彼と握手しようとする人々



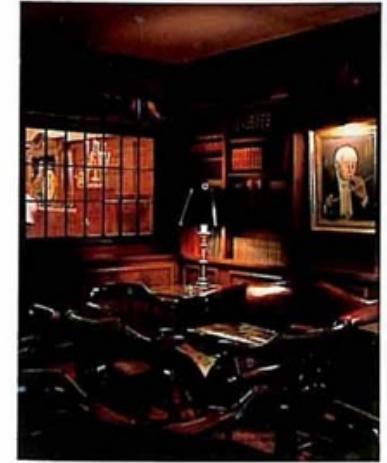
G: プラザ・バー

H: レストラン・カブリーズ

I: メインダイニング・カフェ・プラザ



J: プラザ・バー
K: ティー・コート
L: カブリーズ・バーの入口
M: ライブラー・バー



LIQUOR IN ART

ボストンの男 パークー=スペンサー

「そうよ。あの子は父親似なの。細かいところに気がつくし、きれい好き。わたしとは大違い。わたしは気ままなちよ。」気まぐれな私。あの詩、読んだことがあります?

「ほら、ホイットマン?」

「ホイットマン」おれが言つた。

「ええ、どうも失礼。ホイットマンよ、もちろん。とにかく、わたしは気まぐれで、直感で衝動的に動き、どこへでも行き、何でもするタイプだわ。クリエイティブな人間でいていそうじゃないから?でもケビンはちがう。おかしいことこの上なしで、保守のかたまりのロジヤーとそつくり。夕食は六時で、メニューはありきたり。ロースト・ビーフにベーコン・ビーンズときまつている。テレビでジユリア・チャイルドがやつているような、もっとクリエイティブなもののがたべたがれば、わたしだってお料理するわ。でも、いつもきまつてシチューやステーキやハンバーグでは、やる気がでないでしょ?だからほんたらかし。勝手に料理させているの。もしも二人がチエリーといっしょにワインにひたした小牛肉ステーキがたべたいと言えば……」

「やかましい!」ロジャーがさえぎった。

「お前はクリエイティブじゃない方ではないだろ?」

「おい、ロジヤー、そんな言い方はないだらう」

トラストが割つてはいつた。「奥さんはバーティの時などすばらしい料理をしてくれるじゃないか」

「ああ、わたしの一ヶ月の稼ぎを半分すべて、仕出屋にとどけさせてな」



言われてるけど、口は災いのもと——つてしまなくちゃ。

(『説教』)

主人公スペンサーのキャラクターの第一の特徴は、インテリであるといふことがあるが、やたら

学を卒業して、ボクサー、

警官と職業を替えて私立探偵になつたといふことがある。彼の経験が大きくなり、本筋の経歴を反映していることが多いが、本筋

リーズもその例にもれず、ロバート・B・

パークー自身がボストン大学で博士号を得た。現在、ノースイースタン大学英文学部教授である。しかも、博士論文がハメット、チャンドラー、ロス・マクダナルの作品に登場する私立探偵の研究であり、探偵小説や西部小説について教鞭をとっているブロフエショナル。その彼が緻密に構成した主人公であるから、おもしろくないわけがない。名前のスペンサーにしても、ごく一般的な "Spencer" ではなく、イギリス、エリザベス王朝の代表的詩人エドワード・スペンサーと同じ綴り "Spenser" と、味違う凝りようである。

ホーク(ライバルの黒人探偵)

主人公スペンサーのキャラクターの第二の特徴は、インテリであるといふことがあるが、やたら

学を卒業して、ボクサー、

警官と職業を替えて私立探偵になつたといふことがある。彼の経験が大きくなり、本筋の経歴を反映していることが多いが、本筋

リーズもその例にもれず、ロバート・B・

パークー自身がボストン大学で博士号を得た。現在、ノースイースタン大学英文学部教授である。しかも、博士論文がハメット、チャンドラー、ロス・マクダナルの作品に登場する私立探偵の研究であり、探偵小説や西部小説について教鞭をとっているブロフエショナル。その彼が緻密に構成した主人公であるから、おもしろくないわけがない。名前のスペンサーにしても、ごく一般的な "Spencer" ではなく、イギリス、エリザベス王朝の代表的詩人エドワード・スペンサーと同じ綴り "Spenser" と、味違う凝りようである。

主人公スペンサーのキャラクターの第三の特徴は、インテリであるといふことがあるが、やたら

学を卒業して、ボクサー、

警官と職業を替えて私立探偵になつたといふことがある。彼の経験が大きくなり、本筋の経歴を反映しているが多いが、本筋

リーズもその例にもれず、ロバート・B・

パークー自身がボストン大学で博士号を得た。現在、ノースイースタン大学英文学部教授である。しかも、博士論文がハメット、チャンドラー、ロス・マクダナルの作品に登場する私立探偵の研究であり、探偵小説や西部小説について教鞭をとっているブロフエショナル。その彼が緻密に構成した主人公であるから、おもしろくないわけがない。名前のスペンサーにしても、ごく一般的な "Spencer" ではなく、イギリス、エリザベス王朝の代表的詩人エドワード・スペンサーと同じ綴り "Spenser" と、味違う凝りようである。



（『説教』）

スーザンがサヨナラを言い、おれたちは電話をきつた。ハア! おれは大声で叫んだ。そして、祝い酒にビールの残りを飲みほした。セツクス・アビール、まだおとろえず、往年の迫力、ここにあり! だから彼女はおれに抵抗できなかつた。いや、ボーク・デンダーロイン・アンクルーテだけがお目当てかも……。

オーブンを温めるために火をいれ、ボーケをもどすために肉を入れから出し、パン粉づくりにかかり。アムステルをもう一本あける。でも氣をつけなくてはいけない。彼女がついたとき、へべれけになつていらおしまいだ。今日はともかく仕事、いや半分は仕事なんだ。おれはパリパリのパン粉をつくり、テンダーロインをのせた。そしてタマゴの白味をぬり、中火のオーブンにいれる。

青いリンゴ、ニンジン、レッド・オニオンの皮をむき、スライス、パターをひととかまり加えて、きつちりフタをしたソース・パンにリングコインをのせた。おれはバリバリのパン粉をつくり、テンダーロインをのせた。肉にパン粉を念入りにまぶし、焼肉皿にのせる。テリをつけるためタマゴの白味をぬり、中火のオーブンにいれる。

「ああ、わたしの一ヶ月の稼ぎを半分すべて、仕出屋にとどけさせてな」

スーザンがサンバーランド・ソースも作った。

それからお召しかえ。はじめは金線いりのスマーリング・ジャケットに白い絹のスカーフにしようかと思った。でも、それはみほした。セツクス・アビール、まだおとろえず、往年の迫力、ここにあり! だから彼女はおれに抵抗できなかつた。いや、ボーク・デンダーロイン・アンクルーテだけがお目当てかも……。

「ああ、わたしの一ヶ月の稼ぎを半分すべて、仕出屋にとどけさせてな」

(『説教』)

主人公スペンサーのキャラクターの第四の特徴は、インテリであるといふことがあるが、やたら

学を卒業して、ボクサー、

警官と職業を替えて私立探偵になつたといふことがある。彼の経験が大きくなり、本筋の経歴を反映しているが多いが、本筋

リーズもその例にもれず、ロバート・B・

パークー自身がボストン大学で博士号を得た。現在、ノースイースタン大学英文学部教授である。しかも、博士論文がハメット、チャンドラー、ロス・マクダナルの作品に登場する私立探偵の研究であり、探偵小説や西部小説について教鞭をとっているブロフエショナル。その彼が緻密に構成した主人公であるから、おもしろくないわけがない。名前のスペンサーにしても、ごく一般的な "Spencer" ではなく、イギリス、エリザベス王朝の代表的詩人エドワード・スペンサーと同じ綴り "Spenser" と、味違う凝りようである。



(『説教』)

主人公スペンサーのキャラクターの第五の特徴は、趣味が料理というところ。これが長編小説の随所にてきて、長丁場のうまいスパイスになつてゐる。料理の得意な探偵小説の主人公、美食家多め。やはり冒険、タフネス、美食、美酒、美女は男性にとって永遠の憧れなのであります。

このシーンは、全編を通じてスペンサーの恋人として登場するスーザン

・シルバーマンを家へ初めて招待する(しかも初めて)シーンである。

それにも、ボーク・

テンダーロイン・アンクルーテの手ざわのいい作り方、そしてうまそな

こと。日本でも「男の料理」なるものがブームになつて久しいが、日本の



建設会社社長ロジャー・バートレットの息子ケビンが失踪した。依頼を受けた私立探偵スペンサーはバートレット家に乗り込むが、ケビンの母親マージー・バートレット夫人はいさきか墓もちなら女性である。華やかに見える家庭も裏に回つてみると虚飾のうず巻く人間関係という現象である。そのうえ息子は家庭に愛情をつかしてドロップアウト。それをすべて他人の責任に押しつけようとしている母親と父親……。

ボストンを舞台に、現代アメリカの病果を巧みにつきながら小気味いい

テンポで話が展開していく。クロバート・B・バークーの「スペンサー」シリーズは好評を博し、日本でもすでに十冊を数える人気シリーズになっている。その魅

力はなんといつても主人公スペンサーのキャラクターによるところが大きいが、彼を

取り巻く現代社会の歪みと、そこに発生する犯罪

大きな要因であろう。そしてそこには必ずといっていいとおり、おもしろい

トライアスティックの知識を会話をする。母親はバーティ

タイプ。そして男女を問わずジンを飲む。

トト夫人はいさきか墓もちなら女性である。華やかに見える家庭も裏に回つてみると虚飾のうず巻く人間関係といふ現象である。そのうえ息子は家庭に愛情をつかしてドロップアウト。それをすべて他人の責任に押し

つけようとしている母親

と父親……。

ボストンを舞台に、現代アメリカの病果を巧みにつきながら小気味いい

テンポで話が展開していく。クロバート・B・バークーの「スペンサー」シリ

ーズは好評を博し、日本でもすでに十冊を数える人気シリーズになっている。その魅

力はなんといつても主人公スペンサーのキャラクターによるところが大きいが、彼を

取り巻く現代社会の歪みと、そこに発生する犯罪

大きな要因であろう。そしてそこには必ずといっていいとおり、おもしろい

トライアスティックの知識を会話をする。母親はバーティ

タイプ。そして男女を問わずジンを飲む。

トト夫人はいさきか墓もちなら女性である。華やかに見える家庭も裏に回つてみると虚飾のうず巻く人間関係といふ現象である。そのうえ息子は家庭に愛情をつかしてドロップアウト。それをすべて他人の責任に押し

つけようとしている母親

と父親……。

ボストンを舞台に、現代アメリカの病果を巧みにつきながら小気味いい

テンポで話が展開していく。クロバート・B・バークーの「スペンサー」シリ

ーズは好評を博し、日本でもすでに十冊を数える人気シリーズになっている。その魅

力はなんといつても主人公スペンサーのキャラクターによるところが大きいが、彼を

取り巻く現代社会の歪みと、そこに発生する犯罪

大きな要因であろう。そしてそこには必ずといっていいとおり、おもしろい

トライアスティックの知識を会話をする。母親はバーティ

タイプ。そして男女を問わずジンを飲む。

トト夫人はいさきか墓もちなら女性である。華やかに見える家庭も裏に回つてみると虚飾のうず巻く人間関係といふ現象である。そのうえ息子は家庭に愛情をつかしてドロップアウト。それをすべて他人の責任に押し

つけようとしている母親

と父親……。

ボストンを舞台に、現代アメリカの病果を巧みにつきながら小気味いい

テンポで話が展開していく。クロバート・B・バークーの「スペンサー」シリ

ーズは好評を博し、日本でもすでに十冊を数える人気シリーズになっている。その魅

力はなんといつても主人公スペンサーのキャラクターによるところが大きいが、彼を

取り巻く現代社会の歪みと、そこに発生する犯罪

大きな要因であろう。そしてそこには必ずといっていいとおり、おもしろい

トライアスティックの知識を会話をする。母親はバーティ

タイプ。そして男女を問わずジンを飲む。

「そんなに答えるんですか。たいそうな注文ですなあ。それに、あなたとそんな問題について論議する権限が、はたしてわたしにあるか、なしやだ」とモリアーティ。

「あるやなしや——でしょう?」

「ええ? なんですか?」

「あるが、なしやじや、語法が乱れてます」

先生の職業的な行儀のよさが少し崩れた。

「きみ、わたしは私立探偵風情から文法を教わろうとは思つてませんよ……」

なんてへマなんだ、スペンサー。相手の文法なんかとがめて、むくれさせちまつたから、追つぱらわれるんだぞ。いつも人に

「きみにあつちやかなわないな。ここへ誘つた理由の半分はくどくためだんだよ」

「かもしれない」スーザンはほほえんで、「でも、まずもつて仕事」

「オーケー、もう仕事はたくさん。ぼくは探偵だ。そして、ハンフリー・ボガートの科白じゃないが、探偵というのは読みが早いんだよ、青い瞳さん。そつちが口説かれのを半分子期して来たということは、半

分はそうされたと思ってる証拠だろ」

「わたしの瞳は茶色よ」

「知ってるよ。でも、ボガートに茶色い瞳さんなんて云わせたくないだろう。それに話をそらさないでほしい」

(「點評」)

インテリで料理好きなスペンサーではあるが、風貌はかなりいかつい。ボクサー時代の名残のつぶれた鼻はご愛敬。ともすれば嫌味になりがちな美食の話や文学の話をうまくオブラーントにつぶんでハードボイルドに仕上げるには格好の資格である。

「インク」という本の中で、ハードボイルドな主人公は騎士道という西歐の伝統を受け継いでいる人間であると書いている。誰にも屈せず、自己の道徳律をもたない人間のために、自分の信条に基づいて行動する、この社会における最後の紳士であり、そうあり続けるためには戦い、時には人を殺さなければならぬこともある、とも書いている。名譽を軽んずる世の中で名譽を重んじるがゆえに英雄的の存在となる。名譽は定義することはできないが、見分けることは

容易であると……。
彼の論の実践は、まさにスペンサーであるといつていい。男であることこだわりつづけ、ニューランドの古き街ボストンを愛する男が不器用に、自分だけを頼りに生きていく姿——これが織糸としてつなに全編を貫いている。同じ作品の中に出てくるチャンドラーの言葉の引用、「大きくハンサムなげだもの」とある。



「ユダの山羊」菊池光訓
早川書房刊

私は、歸からじかにアーズを少し飲んだ。口ツキ山脈の湧き水。すばらしい。

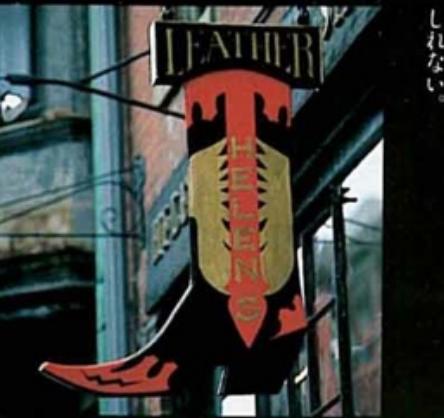
して駄菓子屋をしていて、他のビールもよく登場する。このクアードもどうだし、ハイネケンも飲む。ビールを飲みながらスーザンと一緒にスタジアムでバスケットボールの試合を観戦する描写など、いかにも東海岸的な雰囲気ではある。



FROM THE NECK UP

口ツクーオーバーレ
ストランはワインター・
ブレイスにある。そのウ
インター・ブレイスは、
コモン公園から少し南へ
下つてワインター通りから脇にそれた横町
である。店は、カスタム・ハウス塔が旧ボ
ストンであるのと同じ意味で旧ボストンで
ある。装飾は地味。給仕はタキシードを着
ている。個室のダイニング・ルームがある。
一階にかつての男子専用バアがある。そこ
は、ある日の昼食時間、神父と激しいどな
り合いを展開したユーモアのかけらも感じ
られない女性の一グループによつて解放さ
れた。今は誰でも入つて行つて好きなこと
ができる。マスター・チャージ・カードが
通用する。

私はマスター・チャージを使う必要はな
かつた。私ではなく、ジョン・ティツクナード
が払うことになつていた。会社の金で払う



ので彼もマスター・チャージの必要はない。
私はサヴァンナ風口ブスターを注文した。
会社はハミルトン・ブラック出版社で、一
十万ドルほどもっている。ティックナーは
タラ料理を注文した。



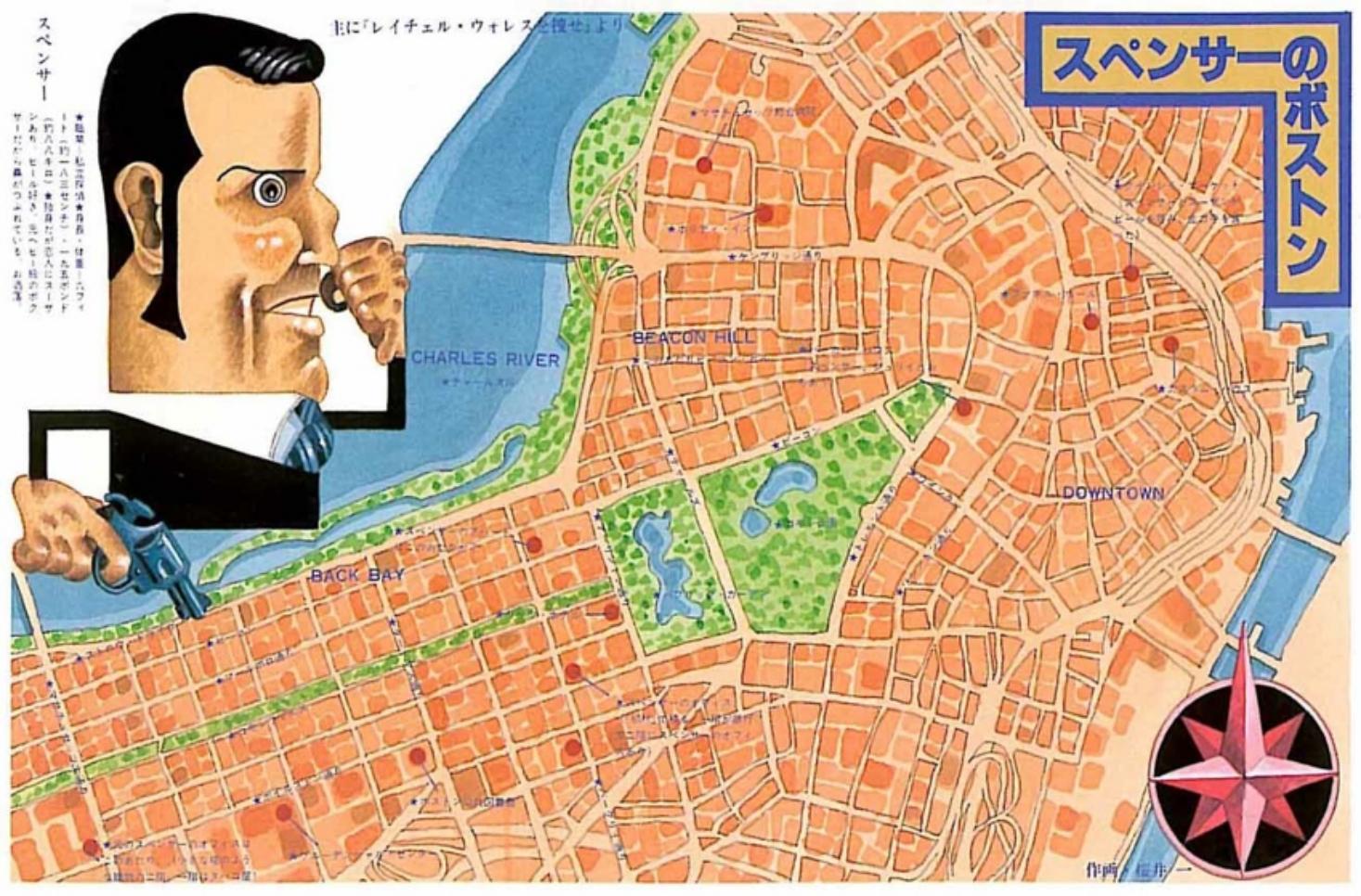
「？」
「ネグロ二が私のハイネケンとティックナーの
ネグロ二のお代りを運んできた。」「ビ
ールしか飲まないのか、ミスター・スペンサ
ー？」
「いや。時にはワインも飲みますよ」
「しかし、強いものは飲まない？」
「たまに。好きじゃない。ビールが好きな
んです」
「で、きみはいつも自分の好きなことをす
る」
「ほんどの場合、できないことも時には
ある」
「彼はまたネグロ二を少し飲んだ。チビチ
ビ飲むのに苦労しているようであった。
「できない場合というの
は？」
「非常に好きなことをや
るために、好きでないこ
とをやらなければならな
い場合があるかもしれない
い」
ティックナーがチラツ
と笑みを見せた。
「哲學的な返事だな」
（『レイチエル・ウォレ
スを捜せ』）



スザン・シルバ

ところで、ここに登場するカクテル、ネグロニ²は、HBA一九八五年カレンダー六月のテーマ・カクテル。フイレンツェのカミーノ・ネグロニ伯爵はアメリカカーノにジンを入れて飲むのが好きだった。そこでバーテンダーのフォスコ・スカルセリ氏がこれをまとめ、許可を得て一九六一年に発表したといういきさつがある。テーマ・イラストを担当しているのはダニエル・シュワルツ氏(ニューヨーク・イラストレータ)協会のハミルトン・キング賞受賞作家。

協力／早川画房



上に「レイチエル・ウォレス」を挿せ

れけれども、ロンドンでは地下鉄やバスの運行はほとんどなくなってしまうのだから反対である。実際二十五日のクリスマスには、地下鉄は午後に一回ずつぐらしか動かない。他の交通機関もみなだいたい同じであるから、この時間は外出は無用である。

教会のミサに出かけようとあって、タクシーを使うと、これまたその数が極端にすくなくて、たまたま拾うことができる。三ポンド（約十四）の割増料金をとられる。しかしロンドンの大聖堂に行つてみると、聖堂内は立錠の余地もないほどに信者たちで埋まっている。そしてこの期間は、どこの聖堂にも、工夫をこらして作られた「クリップ」というキリストの馬小屋での生誕の場面が飾られていて、そのままには絶えずろうそくの火が、何十本となくともされている。

こうしたクリスマスの気分は、年内一杯はつづくのである。そして大晦日から新年を迎えるのであるが、ここに「寿」の気分があらたにないことはない。ロンドンの若者たちは、大晦日の三十一日の晩に、まだクリスマス・ツリーの立つているトラファルガーブ広場に集まつてくる。その数は何万人にもふくれあがるのだから、そこは大変な混雑になる。広場のまえの聖マーチン・イン・ザ・フィールド教会や、

THEME ESSAY ┌─────────「寿ぐ」について

博多祝い唄

九州は博多の生まれなので、やはり酒は好きだ。勤め人ではないから先輩後輩や接待社交のつきあい酒は少なく、飲む時はひと仕事すんだ上での覚悟の酒になるのでやり始める。半日のコースになる。夕方から明け方まで、帰りは出勤中のサラリーマンの流れに逆らつて千鳥足ということもままある。

ハシゴ酒は余りしない。職業がイタツキのカマボコ（机の天板に終日へりついてるので）だから、長つ尻の癖がつてしまつて。半日飲んでも三軒位である。その飲み方をちよつと前までは週に三回はやつていた。この一、鮮一詠は見当たらなくて、「船詠」という語がのついている。

THEME ESSAY ┌─────────「寿ぐ」について

寿ぎ色は、女心をときめかす「赤」

市川秀子（カラリスト）

寿ぐ、言祝ぐ、何とはなしに明るい気分にさせてくれる言葉だ。仕事柄さつそく、色で表すとしたらどんな色かに思ひが走る。二〜三人の仕事仲間にも聞いてみた。実は私、

商品の色づけや、色彩計画という仕事にドッブリと浸かっていてずい分長いが、その中で最近とくに感じるのは色についての関心が急速に高くなっていることだ。

テレビに映るCMの「情報は都市の血液」などといったのが思わず目に止まる昨今は、まさに情報時代だ。視覚に訴えるビジュアル情報も数を増し氾濫するなかで、一瞬にして捨捨振振をくり返しながら生きている現代人。こんな状況をうつしてか、私たちの色の仕事にも次第に様変わりが始まっている。というのは個々の色の持つているイメージを活用して商品のキャラクターづけをしようとする動きだ。

これまで色というとわからないもの、ニガ手なものと思われていたふしもあるが、今は違ってきた。要は色の活用が生活の中に浸透し始めているということであろう。ところで、「寿ぎの色は？」の質問に対して、全部の人が赤との答え。うち二人は紫が赤かと迷つたあげくのことらしかった。あとの人、マーケティングの仕事をしている若い女性は「赤、明るく、それも緋色系の……」との答え。私が最初から決めていたのと全く同じ意見の、はんなりとした柔らかい日本情緒のある赤だ。よく、和服の晴着を着

意味は酒を飲んで詩をつくりうたうこと、とある。これだ

とと思った。

この船詠が博多祝い歌のエイショーエに対応するならば、

唯子詞の意味も分かるような気がする。

これは目出度い席だから、みんなで飲み旦つ嘆い騒ぐ無

礼講も仕様がない、それほど目出度いのだから、というよう

に考えられる。一人勝手な解釈ながら、これだけ、

我が故郷博多は年中目出度いハレの土地だと一人悦にいつ

ている。

田舎の武家社会とも一線を画した町人文化を育んできたの

で、氣風は開放的、都会的、庶民的である。で、つまりド

ンチヤン騒ぎが好きということになる。実際飲む程に酔う程に一人一芸はおろか二芸も三芸も繰り出して楽しむのが

博多っ子である。私自身は残念ながら無芸なので、何か余興をと迫られると無芸大飲ですからと逃げることにしてい

る。その言い訳ではないが、昔、親が旅館をやついて子供の頃大人達の宴会を始終見ているうちに、人前で芸をや

るのは全程の達者でなければいけないという気持ちになつたのである。亡父は仲間と酔つてはよく謡曲をうなつたり

だつた。

その冬はわたくしもロンドンにいた。この時、大英博物館近くの静かなホテルに泊まっていたのだが、大晦日の十二時を合団に、おおよそロンドン市中のすべてのクルマが、いつせいにクラクションを鳴らしはじめたのである。その騒音のすさまじさは、またはるかに想像をこえたものであつた。

この習慣のものは、昔テムズ河に停泊している船が、大晦日にサイレンを鳴らしたもので、いまではテムズ河に汽船は入つてこなくなつたので、そのかわりに街頭のクルマが、クラクションをいっせいに鳴らすようになったのである。これがイギリス流の新年の「寿」なのであるが、大晦日の夜だけはロンドンの市中のホテルに泊まるのは避けたほうがよい。

長谷川法世（漫画家）

「祝い目出度の若松様よ
枝も榮ゆりや葉も繁る
エイショーエ
エイショーエシヨーエ
ショーエ
ア シヨンガネ
ア レワイサソエサソエ
ア シヨンガネ

「祝い目出度の若松様よ
枝も榮ゆりや葉も繁る
エイショーエ
エイショーエシヨーエ
ショーエ
ア シヨンガネ
ア レワイサソエサソエ
ア シヨンガネ



している。朝明けとともに去つていく恋人への想いを譲った女性の詩だ。

もうひとつ朱華色という色名がある。当世風にいうところと贅沢な意図を持つた旅だった。必ずビジネスをからめないと海外に出れなくなってしまった今の自分の忙しさから考えると信じられないぐらい精神的にはゆつたりした旅だったから、その時の出会いは、色々と覚えてる。

覚えている風景はこんな風である。

家族の風景

THEME ESSAY 「寿ぐ」について

数年前、イタリアを旅したことがあった。

ルネサンスの美術を、建築を軸にして見てみようという割と贅沢な意図を持つた旅だった。必ずビジネスをからめないと海外に出れなくなってしまった今の自分の忙しさから考えると信じられないぐらい精神的にはゆつたりした旅だったから、その時の出会いは、色々と覚えてる。

覚えている風景はこんな風である。

数日間過ごしたローマの泊ったホテルの近くに、家庭料理の小さなレストランを見つけた。何やら正式なレストランで一人で夕食をするのもわざわざないので、ホテルの正面を出た先の小路にあつたその店に思い切って入つてみたのだ。思った通り亭主が料理をし、奥さんがサービスをするというイタリアではよくある家庭料理の店で、うまいことにディナーが定食である。

イタリア語などからきしダメであるから、そのディナーを自らに三百回通つた。一日目から顔を覚えてくれた奥さんが今日はトリですよ。といつてくれたりしたのが、メインディッシュが出てきてはじめて分るというのも楽しい体験だ。デカンタのハウスワインを安心してガブ飲みし、あまり客の多くないその店の雰囲気や、時々厨房から出てくるいかにもイタリア人らしい亭主と相互に一方通行の会話もやらかしたりしたものだ。

三日目の定刻に願をのぞかすと、先客がいた。イタリア

明、満月のない朝の光の色をよく美しいものとした日本的心が感じられる色名だ。

とりわけ、女性が華やく恋心の代名詞に、明るい赤が美しいことばで象徴されているのは素敵のこと。万葉時代の女性の奔放、ワイルドな生きざまを美しくロマンチックなものに感じさせるものだ。しかし現代でも恋にときめく女性の色といったら明るい赤、うたかたの恋であれば透明な朱華色、ロゼ・ワインの色と答える。女心のときめき色は古今を問わずである。

望月照彦(建築家)

人の家族であった。

突然、我物頭に入ってきた異邦人の男にその家族の全員が一齐に目を向けたが、それも一瞬でまた黙々と食べはじめている。

席に座ると、にこやかにやつてきた奥さんにいつもの定食とワインをたのんだ。しかし向となくその家族が気になつていて、明らかに日本の家族の風景とは違う感じがしてしまつた。

まず細長のテーブルの頂点にその家族の主人である男が座っている。その左右に主人の母親であるおばあちゃんと、奥さんが座り、男の子一人と女の子二人の子供たちが続いて並んで、細長テーブルを囲んでいる。家族は男を中心とした明確なヒエラルキーによって支配された食事を取つてゐる。

もちろん、その風景がたた苦しいものであるわけではない。時々子供に話しかける父親や母親の顔にはおおらかさ、やさしさがみなぎついていたが、場の関係は明らかに確固たるものだ。細長テーブルを囲んでいる。家族は男を中心とした明確なヒエラルキーによって支配された食事を取つてゐる。

むろん、その風景がたた苦しいものであるわけではない。時々子供に話しかける父親や母親の顔にはおおらかさ、やさしさがみなぎついていたが、場の関係は明らかに確固たるものだ。細長テーブルを囲んでいる。家族は男を中心とした明確なヒエラルキーによって支配された食事を取つてゐる。

さて、この家族構成は、子供を一人除けば我が家と同じものである。しかし、こんな風景を私自身、持つたことがあつたであろうか、とふと思つ。

日本の我家も、日曜日や休日の夕食は、外に出て取ることが多い。しかしこんなイタリアの家族のように厳然とした私はずそんな時いつでも思うのだ。



海の迎春

THEME ESSAY 「寿ぐ」について

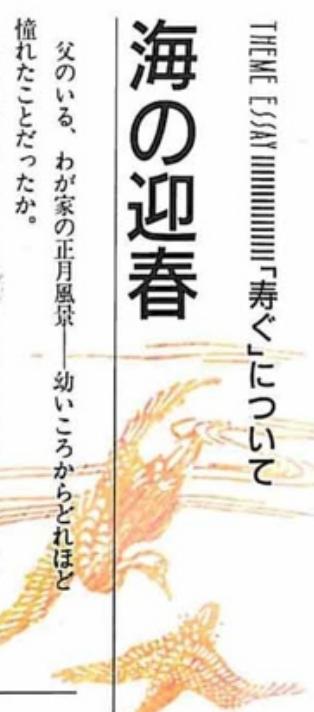
父のいる、わが家の正月風景——幼いころからどれほど憧れしたことだったか。

船員の家庭の正月というのは、淋しい。妻と子だけが、離れておせちの蔵膳を供えて、夫の、父の、航海安全を祈りながら、華やきのうちにどこかひそりと同じ料理に箸を運ぶ。

一家揃つて新年を寿ぐことなどめつたにない。わたしの父は、海上生活五十余年、七十二歳まで船長をしていた。わたしの三十八歳の年までだったが、この長い歳月に、父と迎えた正月はわずか五回にすぎない。それだけに、父がいた、わが家の正月風景は、一生忘れられないだろう。

そうした望外的な迎春のうちで、とりわけ印象深いのは、なぜか雪景色の正月だ。小学校三年生のときだつた。當時、埼玉県の大宮に住んでいたので、武藏一ノ宮水川神社へ、父と一緒に立つて初詣にいった。まだ降りつづく粉雪を傘にうけ、長靴の踏む雪のきしみ音を聞きながら、高みの枝から雪を落とす老杉の並木の参道を、父と並んでほほれと歩いた。家に戻ると、母がいそいそ元朝の膳を用意して待つていた。三人揃つてこの得難い新年を祝い、雪景色につまれて静かな泰の間で、わたしが父に酌をしながら、航海の土産話を楽しんだことだつた。

それだけの話なのだ。とくに何か忘じ難い出来事があつ



高橋泰邦(翻訳家)

したがつて、我家族が、厳然としてある序列の中で、緊張感に満ち満ちて、しかも諸々のおもわく内に秘めて出会うというのは、一月元旦の朝を除いてはないのである。

その日私は、何故かローマのレストランの家族を思い出すつ、上座に座つて確固たる儀式を込めて、ことほぐ。

「昨年は家族一人一人、まあ過不足ない生活を送ることができました。今年もひとつがんばつてしまいまよ……」

それにも、ことほぐということは疲れることだなあと私はそんないつても思うのだ。

暮れから正月を遠い外国の海で過ごすほうが、まだ諦めがつく。

スルの海

团扇片手に陰夜の鐘

などという、夏と冬の季語をぜこぜのへボ句を、父がわざわざ無線でよこした年もあつた。さしづめ諦めの心境を托したつもりだつたろう。

何十年もほとんど毎年、こんな悲哀を味わつてはいる。古手の船長あたりは、なかなか味な味みをする。これは父自身の逸話である。

遠洋航海の復航で、内地帰着が暮れぎりぎりになるとわかれると、正月を家で迎えられるかどうかということが、船

内で最大の関心事になる。入港日が一日早いが遅いかで、吉となるか凶となるか、はるかな洋上から気をもみもみ航つてくる。まさか内地の近くで錨を入れて時間を調整するわけにもいかない。

そこで、父のようない古狸の船長ともなると、深慮遠謀、一千マイルもかなたから船足の微調整にかかる。帰港までの船の速力や時間などの縮密な計算がはじまる。荷役に三日を要するとして、二十九日入港では心もとない。三十日に入港すれば正月明けまで停泊できる。沖仲士が三箇日は休むからだ。会社側は高い停泊料を払つて船を避けさせることになる。だから大晦日までに出帆させようと躍起になり、航海を急がせる。

ふだんなら、帰りの航海は、ホームバウンド・スピードなどと云つて、矢の如き帰心とともに船足が上がるのだが、このときはばかりはその逆だ。その辺の事情は会社側も先刻承知だから、急げ急げと督促の無電だ。それに対して、父の返電は、

「ココシケ ニユウコウオクレル」

遠方の天気情報も得られる時代だから、会社では、晴天下の航海と知つて怒り、やんやの督促だが、古狸は知らん顔。「現場の船長が時化と言つとるんだから間違はない。ココオオシケと言つてやれ!」

そうして、綿密に計算した日程を着々とこなしながら、びたり暮れの三十日に意揚々と入港してくるのである。マジメ船長はとてもできない芸者だ。おかげで乗組員は大晦日出帆などという不運を嘆じる仕儀ともなるが、してやつたりと欣喜雀躍して入港してきた父の船は、錨を入れて万歳の声が船内にどよめく。

こんなふうにして、船乗りはようやく家族や恋人との稀有の迎春を寿ぐことができるのだ。わたしの忘れ得ぬ父と一緒に年越しも、いくどかこんな絆縛の結果だつたのである。その父も母もいまは亡いが、数年来、日本にも海洋芸能が訪れ、帆船小説アームなどと云われている。この時招来を、前半生賄けて願つてわたくしにとつて、近頃の正月は、父母こそいないが、父帰る正月の思い出と重ねて、年毎に心うれしくありがたく寿ぐ迎春である。父も母とともにども寿いでくれているにちがいない。

a story of

"THE BRANDS"

世界の銘酒(14)



シャンバーニュ地方

歴史の檜舞台で祝杯を満たす銘酒 ドン・ペリニヨン

世界に君臨する
銘酒の王シャンパンを育んだ
僧侶の研究とモエ家の威信。

ドン・ペリニヨン——「シャンパンの王」と呼ばれるこの最高級品を、モエ・エ・シャンダン社が世に送り出したのは一九三七年のことであった。以来、五十年余の間にこの名は食通の称賛を一身に受けたのみならず、世界じゅうの国家の公式行事に欠かせぬ銘酒として饗宴の卓を飾っている。十七世紀中葉、修道院の酒倉係だった僧侶が日夜、研究を重ねたワインは、モエ家の手によって大輪の花となり、僧侶の名を再び現代に蘇らせたのである。



モエ・エ・シャンダン社本社屋



百年戦争末期、ジャンヌ・ダルクとともに活躍したモエ家は今……。

モエ・エ・シャンダン社は、いわざと知れたシャンパンのトップメーカーであり、海外における市場占有率は他社をはるかにしている。しかも、コニャックのヘネシー社や、香水のクリスチヤン・ディオール社も傘下に收めるフランスの巨大企業集團。モエ・ヘネシー・クルーパーであり、アメリカやブラジルでも事業を行う国際企業の一員もつ。

モエ社の設立は一七四二年、クロード・モエ氏がネコシアントとして興したこととに端を発するが、モエ家のルーツは、さらに遡る。百年戦争末期、ジャンヌ・ダルクの活躍によりランス大聖堂でシャルル七世が即位した一四二九年、当時、ランス市長の要職にあって英國軍撃退の功を遂げたモエ家一族が、シャルル七世から爵位を受けられたと『ランス年代記』は記している。

一説によると、クロード・モエが葡萄仲介業に従事したのは一七一六年といわれるが、当時の顧客リストは失われてしまい、そのため一七四二年を創立の年としているらしい。それはともかく、以後、モエ家が代々繼いで十九世紀に入り、モエ家中興の祖ジャン・レミイ、モエから娘婿ピエール・ガブリエル・シャンダンに事業が譲り渡され、「モエ・エ・シャンダン社」と名前を変えてから今日に至っている。

この間、シャンパンを貯蔵するカーブは全長一十八キロにまでおよび、また、シャンパンの製造工程も、完璧なまでに完成された感がある。單なる偶発的な発泡ワインとしてのみ存在を知られた十七世紀中期から約一百三十年。ヨルク様に封印された一本のシャンパンの中には、長い試行錯誤と研鑽の歴史がひそんでいるのである。丹念かつ複雑な過程を経て進められる圧搾から発酵まで。

モエ・エ・シャンダン社では、十月に葡萄の収穫が始める。日取りは葡萄の花が咲いて百日をめどとしているらしい。品種はピノ・ノワール、ピノ・ムニエ、シャルドネの二種。シャンパンの銘柄に応じて二品種をブレンドして圧搾するのだが、圧搾は一度に四百キロずつをタンクに入れ、そこから約二千六百六十六リットルの果汁を得る。内訳は、一回目に流れる果汁「キュー」

葡萄の収穫が始める。日取りは葡萄の花が咲いて百日をめどとしているらしい。品種はピノ・ノワール、ピノ・ムニエ、シャルドネの二種。シャンパンの銘柄に応じて二品種をブレンドして圧搾するのだが、圧搾は一度に四百キロずつをタンクに入れ、そこから約二千六百六十六リットルの果汁を得る。内訳は、一回目に流れる果汁「キュー」

第一次発酵の終わった白ワインは、ブレンドされて壠詰され、糖分（さとうきび）から作る、自然酵母を加える（リキュールード・ティラージュ）。壠を密封し、第一次発酵させるために壠にねかす。この間、炭酸ガスが生じて発泡するのに六週間かかるが、壠当たりの圧力が六キロあまりになるため、普通の壠だと割れてしまう。そこでB.S.N社とサン・ゴーバン社というガラス会社二社が特別に作つたものを使用している。ちなみに壠のサイズは六種類あつて、四分の一、二分の一、レギュラー（七百五十ミリリットル）、マグナム（二本分）、シェロボアム（四本分）、レオボアム（八本分）、マチユザレム（八本分）、ナムマナザール（十二本分）。以前は、ナブコドノーサル（十本分）もあったが、現在は使っていない。

壠の等級はグラム・クリュ、フルミエ・クリュ、モワイヤンからなり、合わせて百五十壠、六百十ヘクタールある。このうちドン・ペリニヨン用の壠は十二カ所（すべてグラム・クリュ）のみで、ピノ・ノワールとシャルドネの樹齢三十—四十年の古木から摘み、果汁はキューベだけを使い、オーナーの樽が用いられる。

五週間におよぶリムアージュ、冷却によるおり引き。

六週間の発泡期間中に生じたりはそのままに、二年間横にしてねかす。この際、発生するおりは非常に大切で、発酵によつて生じたガスとのコンタクトをキープする役目を果たす。そして二年後、おりを引く作業を施すのだが、まず壠を斜めにする形で台にのせ（スピトウラ、おりを首のほうへもつて）、これには十八人の専門家が五週間かけて左石、左右に回しながらおりを首のほうへ誘導する（リムアージュ）。す

べ。が二千リットル、一回目の果汁「ブルミエタイユ」が四百リットル、二回目の「ドウジエームタイユ」が二百六十リットルで、二回目の果汁は質が落ちるため、モエ・エ・シャンダンの製品には一回目ならびに二回目の果汁のみを使用している。

これらの果汁をタンクに入れ第一次発酵させる段階で、容積六万リットルのステン



ドン・ペリニヨン像

して直立に立てておく。これを「シオルボラント」とい、おりもそのままにして、さらに、七、八ヶ月置いておく。この期間を経て、よいより引きの作業になる。

完全にシオルボワントがすむと、恒温マインス二十度の冷却槽の中に首の部分をおいて置く。そこで氷ごとおりを抜くことになる。この作業によつて二、三デシリットルのワインが失われるため、ワインを補い、糖分も加えることができる。この糖分の加減によつて辛口と甘口とができるのである。

おり引き作業の完了した場合はボルトカルボンの特上コルクで栓をし、加えたワイン(糖分)が馴染むようにするため、しづかに五カ月間ねかせる。

こうして誕生したシャンパンは、ラベルを貼り、モエ・エ・シャンドン社のシャンパンとして世に出る日を待つわがだが、出を待つシャンパンの数は六千四百万本、毎年の出荷数は約二千萬本になる。このうち三分の一がフランス国内で消費され、三分の二が歐米諸国や日本へ輸出されている。

以上、手短にシャンパンの製造工程を述べたが、ここに至るまでに約三、四年の歳月がかけられている。しかし、ワインテージとなるとそれ以上の年月をかけてねかし、通常は五、六年を費やしている。このワインテージに対するか否かを評議決定する機関は、C.I.C. (Committee Interprofessionnel de Vins de Champagne) と呼ばれる。収穫日、畑の産出量等も決めており、内部は温度が摂氏十五度、湿度八十五ペーセント、ともに一定している。

ジャック・レミイ・モエの親交。

現在のモエ・エ・シャンドン社の本社は第一次世界大戦の戦禍に遭い、一九一四年から再建されたものだが、奥の白い建物は十八世紀からのものといわれている。また、本社から通りを隔てて向かい側には、ナポレオン一世が、一八〇七年にかの地を訪れたことを記念して建てられた迎賓館がそびえ、前には端整なフランス庭園が広がっている。迎賓館には各国のVIPも多く訪れており、たとえばナポレオン三世、メットルニヒ、デンマークのマーカレット王女、スウェーデン王のクヌッペル大公、そして一昨年にはわが国の浩宮様が訪れている。

この華やかな動線の隣は、前述のジヤン・モエによるところが大きい。フランス革命後の困難な時代に彼はモエ社の地位を確立したものにし、彼がオーヴィエ修道院の葡萄畠を手中にした頃には、顧客リュ・アンペリアルなど名づけ今日に至っているのは有名な話である。皇帝からは、そのお礼に一八一〇年、ボルトガル産のオーロッパの王族貴族との親交とともに配置にしてあるという。

ヨーロッパの王族貴族との親交とともに滞在した部室は、往時を偲んでそのままの配置にしてある。この部室は、モエ・エ・シャンドン文化藝術へのバトロナージュのエピソードも



迎賓館と前のフランス式庭園



パーション氏(PH責任者)



壁を飾る肖像画

ながら歓談できるようになっている。

僧侶ド・ペリニヨン、修道院の賄係責任者に任命される。

シャンパン発祥の地であり、ゆえにシャンパン地方の精神的な支柱でもあるオーヴィエ修道院は、モエ・エ・シャンドン社から車で十分の位置にある。僧侶ドン・ペリニヨン

迎賓館に残つてゐる。「音楽の間」と称されるサロンがそれで、ヒエール・ガブリエル・シャンドンが無名時代のリヒャルト・シュトラウスを支援し、後年、彼からオルガンが寄贈されたことに由来する。このオルガンはチチス軍に燃やされてしまつたが、置かれていた部室はいまも「音楽の間」として、米訪者が食後にコーヒー・マールを楽しむ



ナポレオン來訪を記念して、往時のままにとどめた部屋(本社屋内)



同右



博物館に陳列された当時の道具類



ドン・ペリニヨンを再現した人形

ペリニヨンは、この修道院の賄係責任者だった。小高い丘陵地帯であり、泉が湧く地であつたため紀元前からセルト人が住み、古代ローマ時代の二、三世紀にはローマ人が侵略して部落を作り、葡萄の栽培がすでに始まっていた。その後、この地にベネディクト派の修道院が建てられ、葡萄の栽培をはじめとする産業が熱心に奨励され、時はドン・ペリニヨンの出現を待つのである。

サン・メーリの法律家の家に生まれたドン・ペリニヨンは、トエズ会の教育を受け、ベネディクト僧團に加わり、オーヴィエ修道院に配属された。そこで彼は賄係責任者を命じられるのである。時はちょうどフランス革命前であり、荒廃した世潮の中でかなりの修道院も襲撃されたが、そのつど教皇やスポンサーからお金が出るためかえつて富貴であつたともいわれる。そのうえ、当時は住民から税を徴収していた。その税は、パンを作る人はパン、葡萄を作る人は葡萄という具合だったため、ドン・ペリニヨンは集められた果汁が、村や畠によつて微妙な違いがあることを知る。ドン・ペリニヨンの第一の功績は、この複数の村から産出したワインをフレンドしたことにある。その頃は一つの村(畠)の葡萄から一つのワインをつくることが通常で、しかも樽詰めだった。埕詰めはこの樽から食卓に運ぶカラフのよつたもの。そこで、傘下十ヶ村からできたものをブレンドしてより複雑な味を得られることをドン・ペリニヨンは経験として悟つた。これが現在のシャンパン製造の礎といえる技法であることはよく知られている。また読み書きもできた彼は化学反応(発酵)にも興味があつたため、種々の果汁をブレンドすることにより、より良質の白ワインを得ることを覚えた。

そのころ、すでに発泡するワインは偶然がらきていた。北方の寒い地方でつくられるワインは収穫年の翌春を迎えるまで癡泡を続ける。そのため時には栓が吹き飛ん

だり、壇が破損することが多く、こうした発泡するワインを当時は「悪魔のワイン」と呼んでいた。もちろん当初は、彼も発泡

ドン・ペリニヨンはまだ、ワインの第一
次発酵においても温度が重要なことを
知り、カーブの壁を厚さ一・五メートルに
することで温度調節をはかった。彼はとて
ても研究熱心で、このほか二つの樽を用意し
て片方は空氣に触れさせ、一方は密閉して
比較し、酸化が非常にワインに悪いことを
知り、樽の中の空氣を残らず出す装置を作
つたりしている。

ドン・ペリニヨンのつくるワインは、色

らのワイン (Vin de Paille) と称した。ルイ十四世は「麦わらのワイン (Vin de Paille)」と称した。

トン・ペリニヨンはまだ、ワイン作りのための清潔感を重要視して、悪いバクテリアの伝播防止に意を注いだ彼は、この地で湧く泉を利用して圧搾機や壜をすべて清潔に洗っていた。彼はそのことをとても誇りにし、皆に手紙を出していた。その書簡は今

も修道院に展示され、閲覧できる。
この話で面白いのは、トン・ペリニヨン
は盲目だったという通説が、まったくの偽
りであつたということである。ただ、當時
はろうそくの炎を明かりとしていたため仕
事の根をつめれば目を酷使するのは当然で、
しかも七十七歳という当時としては長寿の
ため、年をとつてからは目が弱ったことは
ない、と誰も思はなかった。

大いに指摘される事実ではあるが、
厚手の壙とコルクの栓。
この二つの大きなヒント

ドン・ベリニヨンが熱心に研究したこと
もあって、オーヴィエのワインは、名声も
高めていった。とりわけホーディタ派の
僧侶が伝道の旅の傍ら喧伝したこととあつ
て、地方の人々は、ベリニヨンは人の名で
なく地域の名だと思つたほどだといふ。
そして、ある時、ドン・ベリニヨンは、
倉の中にいる堀の中から肉厚の堀を発見、

これか今までの壇と異なるものと直感し、
これに直接ワインを詰めてみたら壇の中で
ワインが発酵していることを発見した。そ
れ以前は樽であるため炭酸ガスが逃げてい
た事実に行きついたのである。
こうして、しだいに発泡性ワインの研究
を開始したドン・ペリニヨンだったが、ま
で間違は山積みになつて、や。



ジョン・ペリニヨンのレリーフ



案内をお願いしたシモン女史は、ドン・ペリニヨンの研究家でもある。



山野のフルート音楽



卷之三十一



卷之三



Photo by G. L. Johnson

つてしまふ。そこでおりをなるべく飲まないようにするため、グラスも研究された。

この間、ドン・ペリニヨンによつて解決された、くつかりの手去り、ンヤノダ

100

この教会に憎恨

ペリニヨン

に眠っている…

An aerial photograph of a vast agricultural field, likely a vineyard, featuring numerous parallel rows of dark green grapevines stretching across the landscape. The field is bordered by a light-colored path or road on the left and a more rugged, textured area on the right, possibly a hillside or different type of land use.

A large, circular metal door or hatch set into a wall, likely a vault or safe. The door is made of thick metal plates with a grid pattern on the left side. It features two horizontal bars across the center and a small plaque at the bottom. The surrounding wall is made of rough, textured concrete.



[View all posts by admin](#) | [View all posts in category](#)

